
Acacia

七緒なお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A c a c i a

【Nコード】

N 6 9 6 9 V

【作者名】

七緒なお

【あらすじ】

『先生を初めて見た時、息もできなかった——』
新任教師と生徒の恋愛を書いています。
ちよっぴり切ない…王道？なお話。

自サイト（a k k o r d）にて連載中のお話です

桜と君と1

「——うわぁ…今年も満開だ……」

——時は4月初旬。

世間ではそれぞれの新しい生活がスタートする頃。

ここ、私立櫻華高等学校も、本日始業式を迎える事となっていた。
通常の登校時刻より、ほんの少し早い時間。

校舎の裏、裏門へと続く道を少し逸れた所にある、1本の大きな桜の木。

櫻華高等学校、という校名にふさわしいような、一際目立つその木。

今年、2年生に進級した私、藍澤結夢^{あいざわゆめ}は、その桜の木がとても好きだった。

初めてこの木を見たのは、1年前の入学式の日。
入学式という晴れの舞台に緊張していたせいなのか、早く着いてしまった高校生活最初の日。

せっかくだから…と、1人のんびり校内を散策している時に、たまに見つけた1本の桜の木。

満開に花を咲かせたその桜の木を初めて見た時、

そのあまりに立派な佇まいに、しばらくその場を動けなかった。

それから、その桜が散ってしまうまで、朝早く登校してその木の下で桜を眺めるのが

私の日課になった。

それは次の年も変わらず——。

始業式の始まる時間より少し早く登校し

今、こうして2年目の満開の桜を眺めているのだった。

——と、その時…突然強い風が吹いた。

桜の花弁が風に舞う。途端、私は目を強く瞑った。

強風が吹いた時、こうしてしまうのは、おそらく大抵の人がそうだろう。

長くも感じた風が通り過ぎた後、瞑っていた瞳を薄っすらと開けると飛び込んでくる、風に舞う桜の花弁達。

もったいないなあ…。

そんな事を思いつつ、ふと横に視線を走らせる。

ドキッとした。

一瞬、瞳が開き、動く事も視線を逸らす事も、呼吸をする事すらもできなかった。

——あまりにも綺麗だったから。

何の気なしに視線を走らせた方向、そこに立っていた1人の男の距離にして10mあるかないかという距離。

こちらに気付いているのかいないのか、彼はただ桜の木を見上げていた。

誰………？

スーツを着ている事から、生徒ではない事はわかる。

というより、生徒というには大人の雰囲気のある人。

背が高く、濃いグレーのスーツを来た彼は、まさしく大人の男といった感じだ。

彼は、ただ桜の木を見上げている。

視線を少し下げた所にいる私になんて、まるで気付かないかのよう
に。

彼の瞳はただじっと、その立派な桜の木に向けられていた。
それが私にはなんだかもどかしく、そして何故か悲しかった。

こうしてわざわざ始業式の日に早く登校してまで見に来る程好きな
この桜の木も

なんだか今は、ちょっと恨めしく感じてしまう程に。

自分の体が自分の体でなくなったような感覚だった。

もしかしたらこうして自分が彼を見ている事に気付かれてしまうか
もしれない。

そう思うと瞳を逸らさなきゃ、と思うのに逸らせない。

苦しいような、痛いような…自分でも説明できない不思議な感情。

瞳が逸らせない。指の1本ですら動かせない。——動悸が早まる。

どのくらいそうしていただろうか。

数分か…それとも数秒だったかもしれない。

2人の間に流れる静寂は、私を呼ぶ声で終わりを告げた。

「おはよ、結夢。やっぱりここにいた」

明るい声と共にやってきたのは、内山うちやま芙美。

私の幼馴染でもあり、親友でもある。

「あ…おはよ、芙美」

「結夢ったらどうしたの？ボーっとして…」

芙美は、背中の半分くらいまである真っ直ぐな髪の毛と同じ色をした漆黒の瞳をクリクリさせて、私の顔を覗き込む。

「う、うん。何でもないよ」

「——そう？ね、そろそろ行こ？始業式始まっちゃう」

「あ、うん。そうだね…」

クルツと足取り軽く踵を返した芙美は、私の腕を引っ張り歩き出す。私は芙美に連れられ、校舎の角を曲がる寸前、あの男の人が立っていた場所へ、今一度視線を向けた。

——が、そこにはもうその姿はなかった。

桜と君と2

ザワザワと話す声、バタバタと急ぐ足音

始業式が始まる前の体育館は、色々な音で溢れている。

私の通う、ここ櫻華高校は、クラス変えがなく、

3年間持ち上がり形式をとっているので、

今年も、芙美と同じクラスだ。

『藍澤結夢』と『上野芙美』——出席番号1番と2番。

2年5組の列の先頭で、2人でコソコソと話をしていた。

「——芙美、いた？」

騒がしい館内。そんなに声を潜めなくとも周りに聞かれる心配はないだろうが

芙美にかけた声は必要以上に小さくなってしまった気がする。

「んー……いないみたい……」

芙美はキョロキョロと辺りを見回して、目的の人の姿が見えない事に少し落胆しながら答えた。

「まだ来てないのかな？」

「そんな事はないと思うんだけど…。今朝は早めに出るって言うってし……」

そう言いながら、芙美はまだキョロキョロと探している。

探し人とは、芙美の恋人。

中学3年生の時に、家庭教師をしてくれていた彼。

何でも、父親の取引先の息子らしく

父親が勝手に相手方と決めてきた家庭教師話に最初は反発していた
芙美も

彼に会い、接していくうちに、いつしか想うようになっていたとい
う。

家庭教師の期限は高校入試まで。

このまま会えなくなるのは嫌だと思い、高校入学と同時に芙美から
告白をしたら

実は相手も芙美の事を…という少女漫画のような展開だったらしい。
『なんか笑っちゃうでしょ』と芙美は恥ずかしそうに笑っていたが
とても羨ましく思えたのを覚えてる。

自分の好きな人が、自分の事を想っていてくれて
気持ちを通じ合う…それは奇跡に近い事だと思う。

16歳の高校2年生。自分だって、今までそれなりに好きな人がで
きたりした。

でもそれは、いつも私の一方通行ばかり。

だから、好きな人と、気持ちを通い合わせる事ができて
いつも幸せそうに彼の話をする芙美を見ていると
まるで自分の事のように嬉しくなる。

そして今日から、私達が通う、ここ櫻華高校に

その芙美の恋人が来る事になったのだ。

私も何度か会った事のあるその彼を、今こうして2人で探していた
のである。

そうこうしてるうちに、始業式開式の時間になった。

ザワザワ騒いでいた生徒達も、皆自分の席に着き、舞台に視線を向
ける。

舞台上では、始業式の進行担当の教師が、開式を伝えていた。

「——あ、いた」

その時、芙美が更に声を潜めて、後ろから背中を突付いてきた。私は視線だけで後ろを向き、芙美の指の先を追う。

「右から3番目」

耳打ちされた人を見る。

「あ、ホントだ。今日はかつこよさ2割増？」

芙美にだけ聞こえるくらいの声で、ちよつとふざけて言う。

「でしょ？……なんてね」

少し照れながらそう言う芙美は、嬉しそうな……けれどもどこか切なそうな顔をしていた。

「大丈夫だよ。芙美と彼なら……」

「……ん。ありがと……」

芙美の指の先は、舞台上。

そこには、新任の教師達が並んでいた。

好きな人と両思いになれたと嬉しそうに言っていたのがちょうど1年前。

それから、いつも幸せそうに彼との話を聞かせてくれていた芙美の様子がおかしかった、あの日。

どうしたのかと聞いたら、辛そうな切なそうな……何とも言えない表情で

『彼の就職先が、櫻華高校に決まった』——そう芙美は答えた。

彼の就職先が決まったのは純粹に嬉しかった。

自分は彼が家庭教師をしていた元教え子で

彼の教え方や授業のわかりやすさ、おもしろさは1番わかっていた。

“教師”と言う職業は、とても向いていると思う。

でも…何も自分が通う高校の教員に決まらなくても…そう言いながら力なく笑った芙美の表情を、今でも覚えてる。

『教師と生徒』の恋愛。

世間では“認められない関係”

例え『家庭教師と元教え子』という関係が恋愛に発展したのだとしても

思いが通じ合った時に、高校生と大学生だったとしても恋人が自分の通う高校の教師となった今、それは認められない恋愛に変わる。

でも、結夢は知っている。幸せそうに笑う芙美を。

嬉しそうに恋人の話をする芙美を――。

世間では認められない関係だとしても、自分だけは応援しようと思つた。

「みねぎしよりと峰岸頼人です。担当教科は化学です」

舞台上では、芙美の恋人が挨拶をしていた。

桜と君と3

「ならはしろうじ檜橋燈吾なるはしろうじです。担当教科は数学です」

舞台上ではまだ新任教師の自己紹介が続いていた。

自己紹介と言っても、名前と担当教科を言うくらいだが。

聞こえてきた声に、何とはなしに視線を舞台上に戻した。

——その瞬間、また音や時間がすべて止まったかと思った。

すらつと高い背。整った顔立ち。清潔感のある黒い髪。良く通る声。そして何よりも——あの“瞳”。

——！！あの人だ・・・。

今朝、あの桜の木の下で見た、その人。

彼を見た瞬間、動く事も息をする事すら忘れてしまっくらいだったのだ。

見間違える筈がない。

何とも言えない存在感を感じる。

そこに立っているだけで空気を変えてしまうような…。

何て言うんだろう、こういうの。圧倒される？目を奪われる？

とにかく、私の視線は彼から逸らす事を忘れたかのようなだった。

「——ね、かつこいいね？あの人」

壇上にいる彼から目を離すことができずにいると後ろからちよんちよんと肩を突付かれた。

首だけで振り向くと、いたずらっぽい笑みを浮かべた芙美がいた。

「え…っ！？な、何、急に…」

芙美にそんな風に言われてしまうくらいにまで自分が壇上の彼を見つめてしまっていたのか、と内心焦る。

「んー…でもどっかで見た事ある気がするんだよね…」

そんな私の心配を余所に、芙美は何かを思索している。

彼女に気付かれないよう、ふうつと安堵の溜め息を小さく零すと今度はこちらがいたずらっぽい笑みを浮かべた。

「芙美ってば、いいのぉ？そんな事言っちゃって。頼人さんに言っちゃおっかなあ？」

「あ、ちよつと！結夢！んもうっ、頼くんには内緒だからね！？」

「はいはい、わかってますー」

頬を少し染めて膨れる芙美に、クスクス笑いながらそう返すともうつと言いながら、彼女もクスクスと笑い出した。

綺麗だな、と思う。

背中の半分くらいまである、真っ黒でサラサラなストレートヘア。それに同じ色の瞳。ちよつと切れ長で。

そして通った鼻筋…彼女を形容するなら、間違いなく“綺麗”だと思う。

でも、そういう事じゃなくて。

恋をしているから、なのかな。そして好きな人に愛されているから。“恋をすると女の子は綺麗になる”ってよく言うけど…

本当にそうだと、芙美を見ていると心から納得する。

ふとした表情だとか仕種だとか…すごく綺麗になった。

まあ元々、綺麗な顔立ちだし、スタイルもいいんだけど。

でもそれだけじゃなくて。内面から溢れる幸せな気持ちだとか自信だとか

…そういうモノが、芙美を更に綺麗にさせているんだと思う。

「ん？何よー？結夢ったら。人の顔ジーツと見て」

いつの間にか芙美の笑顔に魅入ってしまったてらしい。

芙美がちょっと照れたように言う。

「うん？ただ…芙美は綺麗だなあ、と思って」

「あら？結夢さん、私に惚れた？」

「子供の頃から惚れてますよ？もう知り合った時に一目惚れ」

「やだもうつ！結夢ったらやっぱかわいいっ」

始業式だという事も忘れ、芙美は後ろからぎゅうつと抱き締めてきた。
た。

ちょっと悪ふざけが過ぎちゃったかな？騒ぎ過ぎちゃったかも。

視線を感じて、そちらを向くと、担任教師が咎める様な視線をこちらに向けていた。

芙美と2人、顔を合わせて苦笑した後、視線を前に戻す。

いつの間にか、新任教師の紹介は終わり、

始業式ももうすぐ閉式しようというところだった。

体育館から各教室へと流れる波に逆らわず、私達も自分達の教室へと向かう。

今日はこの後、係りや委員決めがあったはず。

今週1週間は変則授業…というか身体測定や教科書購入、

クラスの親睦を深める為、と称したオリエンティングなどがある。
通常授業が始まるのは来週から。

クラス替えがないのに“クラスの親睦を深める”オリエンテーリン

グが

毎年あるってのも、変な話だけど。

「——で、一目惚れでもしちゃった？結夢ちゃんは」

「へっ!？」

もうすぐ教室に着こうというところで、突然聞こえた芙美の言葉に何とも間抜けな返事をしてしまった。

「だってさつき、ほうつと見つめてたじゃない？か・れ・を」

バツと音がしそうなくらいの勢いで芙美の方を振り返ると

何でもお見通し、とても言いたげな瞳とぶつかった。

この反応こそ、バレバレなんだろうけど——…。

いたずらっぽく笑う芙美の顔を、瞳を開いたまま暫く見つめてしまったが

こういう顔をしている時の芙美は、妙に強いと言つか

何か確信を持っているからこそ、こうい言うい方をするわけで…。

長年の付き合いで、それをよくわかつている私は、観念するしかない。

「…別に一目惚れ、とかじゃなくて……」

結局、朝の一連の出来事を、白状させられたのだった。

桜と君と4

その場にただで空気をも変えてしまおうって、少ないと思う。存在感がある人はたくさんいる。

でも、空気を変えるまでの存在感を持っている人ってあまりいない。檜橋先生は、その1人…だと思う。

初めて見た時、一瞬にして空気が変わった。

身動きをとる事も、呼吸をする事さえも忘れてしまいそうだった。怖い、とはちよつと違うけど…似たような感覚だったと思う。

あんな人、今までに出会った事ない。

「へええええ！なんかロマンチック！」

朝の一連の出来事を一通り話し終えると、芙美からはそんな言葉が返ってきた。

「ロマンチック…って、そんなじゃないよ」

もちろん、時間が止まったように魅了された事は内緒。

そんな事を芙美に話したら、何言われるか…。

冷やかされるだけならまだいい方。

芙美なら『告白！』なんて言いかねない。

そんなじゃないから。ただちよつと存在感に圧倒された、だけ。うん、それだけ。

「でもさ…あの時、あの場所に結夢以外いたっけ？」

「うん、それが…芙美が来た時にはもういなくなってたんだよね」

「えーちよつとお…それってホントに先生？結夢って霊感強くなかった？」

「や、やめてよっ！あれは檜橋先生で間違いないもん」

「ふーん？ “間違いない” ね。断言できちゃうんだ、結夢ちゃんってば」

「…っ！」

にやりと楽しそうに笑う芙美に、言葉が返せなくなる。きつと今、私の顔は赤くなってるんだろ？

芙美の楽しそうな表情を見れば、聞かなくてもわかる。

「あー…っ…」

私の口からは、そんな言葉しか出ない。

それこそが、芙美の言っている事を肯定してる事になってしまっただけ。

「うんうん。わかったわかった」

何がわかったと言うのか。

芙美は1人納得したように、うんうんと頷いている。

「だからっ……」

「はい、席着いてー」

芙美の誤解を解こうと思った私の声は、無情にも担任の声にかき消された。

仕方なく、椅子ごと体を前に向ける。

1番廊下寄りの列の1番前の席。出席番号1番の指定席。

櫻華は共学校だけど、男女混合の出席番号なので『あいざわ』の私は、大抵1番だ。

担任教師が教卓の前に立ったのを見計らって、号令をかける。

今週は、私と芙美が週番。

担任は現国担当の女教師。年齢は30代後半っていったところだろうか。

生徒の意見を尊重してくれるし、授業もおもしろい。
なかなか人気のある先生だ。私もこの先生の授業は好きだった。

学年のそれぞれの教科担当の教師は、そのまま持ち上がりとなる為
去年1年生を教えていた教師達は、今年は2年生を受け持つ事にな
る。

櫻華は、副担任制をとっていない。

その代わり、学校の行事などには、学年担当の教師達が一緒に参加
する。

その学年の教科担当教師達が、その時々に応じて副担任代わりとな
る。

「じゃあ委員と係りを決めようかしら。えっと…藍澤さんと上野さ
ん、とりあえずお願い」

これも1番のさだめ、かな。

クラス委員の決まっていな、新学年の初めはこうしてクラス委員
代わりを

させられる事も少なくない。

ちらり、と後ろを振り返れば、芙美も同じように『仕方ないよね』
って顔してた。

去年と同じ面子だからか、委員と係り決めは揉める事無くすんなり
終わった。

私は、芙美のたつての希望で、一緒に化学係り。

どうやら頼人さんは、うちの学年の化学担当らしい。

特にやりたい係りもなかったし、何より芙美の嬉しそうな顔を見て
いたら

こっちも嬉しくなるから、迷う事無く一緒にやる事にした。

「じゃあこれで今日はお終い。週番、号令よろしく」
担任の声に、号令をかけて今日1日の予定が終わる。

「ねえ、結夢。化学教官室行かない？」

帰り支度をしていると、後ろから芙美に肩を叩かれた。

「え？いいけど…大丈夫なの？」

「平気よ。化学係りとして、これから1年教わる先生に挨拶に行くだけなんだから」

「そうだね。うん、いこっか」

櫻華は、教師1人ずつに教官室が与えられている。
頼人さんの教官室はすぐに見つかった。

ノックをすると、すぐに中から返事が返ってきた。

「失礼しまーす」芙美と2人で中に入ってすぐにドアを閉める。

「芙美？まあ来ると思ってたけど。結夢ちゃん、久しぶり」

「お久しぶりです」

「5組の化学係りです。峰岸先生にご挨拶に来ましたー」

ふざける芙美に、頼人さんは優しい笑顔を見せる。

その時、コンコンとドアをノックする音が聞こえた。

瞬間、私と芙美は顔を見合わせる。

私達がここにいる事を、怪しまれたりしないだろうか。

「大丈夫だよ。2人は係りで挨拶に来てくれただけ、だろ？」

そんな私達の考えがわかったのか、頼人さんは少し笑ってそう言う
と教官室のドアを開けた。

「ああ、なんだ。お前か」

「なんだ、はないだろ。なんだはー…」

そこまで言いかけた訪問者が、私達の存在に気付いて言葉を止める。

今日何度目だろう。こうして動きが止まってしまったのは。

入ってきたのは、檜橋先生だった。

桜と君と5

「…悪い、取り込み中だったか？」

檜橋先生の声で、我に返った。

見つめてしまっていた事に気付いて、慌てて視線を逸らす。
と、何かにやにやとこちらを見つめている芙美と目が合った。
うう…また後で芙美に何か言われそう。

「いや、いいよ。この2人は生徒だけど…生徒じゃないから」

頼人さんのその言葉に、檜橋先生がチラッとこちらに視線を向ける。
私を見た先生が一瞬瞳を見開いた……気がする。

ただとすぐに芙美に視線を移し『ああ』と納得したように頷いた。

「紹介するわ。俺の友達で今日からここの数学教師の檜橋燈吾」
始業式でも紹介されてたけど、と付け足すと

「んで、こっちが内山芙美と藍澤結夢ちゃんね。2人とも5組の生徒」

と、私達の事も紹介した。

「…あ、よろしくお願いします」

「よろしく」

初めて自分に向けられた先生の言葉に、鼓動が早くなるのを感じる。

「燈吾も2年の担当だから。5組の数学もね」

「あ、そうなん——…」

「ああーっ！——！」

「うわ。芙美、何だよ急に…」

1人何かを考え込んでいた芙美が急に大声を上げた。
頼人さんは呆れているし、檜橋先生もビックリしたようで目を丸くしている。

「思い出した！燈吾さ…じゃなかった先生。前に1度会った事ありますよね？」

「あるよ。久しぶり、芙美ちゃん」

「やっぱり！どつかで見た事ある顔だなあ…と思ってたんだ」

「…人の友達を忘れるなよ。芙美らしいなあ」

「う…っ。だから今、思い出したもん」

相変わらず仲の良い芙美と頼人さんに知らず笑みがこぼれる。
芙美は行動力があるっていうか、たまに暴走しちゃう時があるんだけど

そんな芙美を頼人さんはいつも優しく見守ってる感じがして…なんか羨ましい。

頼人さんって見た目もそうだけど、性格も温和そうだもんなあ…。

そんな事を思いつつ、ちらりと燈吾を盗み見てみる。

先生、背高いなあ…。

確かに自分は156cmと、背が高い方とは言えないが…

それにしても、燈吾は高い。見上げてしまう。

180cmはあるんじゃないだろうか。

頼人も同じくらい上背があるのだが、雰囲気のせいなのか…威圧感が違う気がする。

頼人がゴールドン・レトリバーだとしたら、

燈吾はドーベルマン、と言ったところだろうか。

芯の強そうな鋭い瞳。

一睨みされたら、竦み上がってしまいそう。

「——何かついてるか？」

そんな事を考えながら、じっと燈吾を見つめてしまっていたのだらう。

訝しげに眉を寄せた燈吾が、少し身を屈めて覗き込むように訊いてきた。

「…あ、いや…えつとその…背、が高いなあって…」

まさか“ドーベルマンみたいですね”とは言えず、曖昧に誤魔化す。嘘は言っていない。本当にそう思ったのだから。

燈吾は一瞬驚いたように眉を上げると、少し瞳を細めた。

「藍澤が小さいんじゃないか？」

“藍澤”——この学校の先生なら、誰しも使う私の呼称。

先生達だけでなく、仲の良い友達以外は大抵こう呼ぶから、耳慣れるはずなのに。

“彼に呼ばれた”というだけで、小さく心臓が跳ねた気がした。

「う……確かに高くはないですけど……」

「結夢ちゃんは、その位の方が結夢ちゃんらしいよ？」

「そうよー？小さくてほわわんとしてて…背の高い結夢なんて想像できないもの」

「ううー…嬉しくない」

いつの間にか、こちらの話に加わっていた頼人と芙美に立て続けにこう言われ

結夢は少し唇を尖らし、拗ねた顔をする。

「ほら、そういう仕種も小さい方がかわいいじゃない？」

「小さい小さい言わないでよ、もうっ」

そんな私と芙美のやり取りを笑って見ていた頼人さんが思い出したかのように、檜橋先生に視線を移す。

「そつえば燈吾、何か用があつたんだろ？」

「——いや、別に用って訳でもないんだけどな…」

「ん？……どした？」

檜橋先生は、チラッと私と芙美を見てから、また頼人さんに視線を

戻し続ける。

「…俺の教官室の前に先客がいたから、お前の所に来た」

「……ああ。あの人が」

何か思い当たる事があるらしい頼人さんは苦笑して言う。

「でも燈吾らしくないな。お前だったらはっきり言うかと思っただけだ」

「職場で面倒事はごめんだからな」

2人の話からじゃ何の事かさっぱりわからなかったけど

眉を顰めて嫌そうに話す先生と、苦笑している頼人さんを見て

良い話じゃない、って事だけはわかった。

「さすがにもう帰っただろ。……戻るわ」

「おう。まあ…頑張れ」

頼人さんの言葉に、小さく苦笑して片手を上げると、先生は教官室を出て行った。

「さて、私達もそろそろ帰ろうか」

芙美の声に、慌ててドアから芙美に視線を移す。

「あ、うん。そうだね」

「まだ仕事残ってるから送ってってやれないけど。気を付けて帰れよ」

「はい。頼くんもお仕事頑張つてね」

サンキュ、と笑みを浮かべた頼人さんに『さよーならー』と笑顔で言うつと、私達は教官室を出た。

もうほとんどの生徒が帰宅したのだろうか。

校舎内はひっそりと静まり返っていた。

教官室が奥まった所にあるせい、かもしれないけど。

「——しかし、今日の結夢は大胆だったなあ」

「ええっ！？な、何が！？」

思わず大きな声が出てしまい、しんとした廊下に響いた。

芙美はちよつといたずらっぽく笑うと小声で続ける。

「あんなに近い距離でじつと燈吾先生を見つめちゃって」

「み、見つめてなんかいないもんっ」

こんな所で。誰か他の先生とかいるかもしれないのに。

そんな事を言い出した芙美に慌てて否定する。

もちろん、今度はしつかり声を潜めて。

「好きになっちゃった？」

芙美のストレートな言葉にビックリして彼女を見ると、優しい瞳とぶつかった。

好き？私が先生を？……………わからない。

つい彼に視線を向けてしまうのは本当。ドキドキするのも認める。だけど“好き”かと問われるとわからない。

だって、先生とは、今日出逢ったばかりだから。

「……………好き、とかそんなんじゃ…」

それに、まだ自分の気持ちもはっきりしてない時に

周りに適当な事を言つて、盛り上げられるのは嫌だった。

芙美の事は大好きだし、なんだかんだ言つて面倒見の良い彼女には子供の頃からいつも助けてもらつてばかりで、本当に感謝してる。

だけど、周りに盛り上げられて、なんとなく流されたように好きになるのは嫌だ。

——彼の事に関しては、何故か特に強くそう思った。

「そっか。でも何かあったら、いつでも相談してよ？」

うまく答えられず俯いてしまった私に、芙美は優しく笑った。

「…うん、ありがと」

「素直でよろしい」

「もうっ！子供扱いするのやめてよぉ」

頷いた私の頭をよしよし、と小さい子にするように撫でると芙美はいたずらっぽく笑った。

桜と君と6

新学年が始まって最初の週の金曜日。

今日はオリエンテーリング。

土日を挟んで月曜からは通常授業が始まる。

学校から歩いて20分くらいの所にある、ここ森林公園。

ソロソロと並んで歩く姿は、なんだか小学生の遠足みたいでちょっと笑えた。

1年生の時は、校内を覚えるという意味も込めて校内オリエンテーリングだったから

ちよっとワクワクする——こんな所も“子供っぽい”って言われる所以だろうけど。

今日、ここに来てるのは私達2年生だけ。

着いてすぐ、クラス毎にオリエンテーリングをした。

事前に先生達がつっておいた目印を、地図を頼りにすべて見つけるというモノ。

全6クラスで、クラス毎に早さを競って…うちのクラスは3位だった。

うーん…微妙。

と言うか…高校生にもなって夢中になって目印を探してる自分達がちよっとおかしかった。

でもみんな、口ではなんだかんだ言いつつ、楽しんでるみたいだったから

“クラスの親睦を深める”っていう目的は成功に終わったと思う。

そして今は、オリエンテーリングも終わってお弁当を食べて自由時間。

私は壮観な桜並木を歩いていたけど、ちよっと奥まった所に1本の

桜の大木を見つけて

そっちに行ってみる事にした。

たくさん桜の木が犇めき合うように咲いている姿も好きだけど
1本だけぽつん、と立っている桜の木を眺めるのは、もっと好きだった。

「うわぁ……すごい……」

学校の校舎裏に立つてる結夢のお気に入り桜の木も、とても立派だが

ここにある桜の大木も、その佇まいは相当なものだった。

しばらくその圧巻な風景に見入っていると、後ろからパキッと小枝を踏むような音がした。

「……櫓橋先生……？」

振り返ると、そこには燈吾が立っていた。

「こんな所で何してるんだ？」

振り返った私に、一瞬瞳を開いた先生が静かに聞く。

「あ、この桜の木があまりにも綺麗だったから、つい見惚れちゃって……」

私がそう言うと、先生は桜の木を見上げた。

そして、しばらくそれを見つめた後、また私に向き直って私がさっきまでいた方を指差す。

「普通、桜を見るなら、向こうの並木の方じゃないか？」

「そうかもしれないけど……私、こういう1本だけ立ってる桜って好きなんです。」

なんか淋しそうなんだけど……でも、凜としてる姿がすごく綺麗で……」

私の言葉に、先生はまじまじと私を見た。

変な子って思われたかな、と少し慌てて言葉を続ける。

「芙美には、いつも“変わってる”って言われるんですけど……」

「ああ。そういうば芙美ちゃんは？」

芙美の名前が出たところで、私の隣に彼女がいない事に気が付いた

ように聞かれる。

「さっきまで一緒にいたんですけど、頼人さんの所に行っちゃいました」

「…なるほどね」

苦笑交じりに答えた私に、同じように小さく苦笑を浮かべて先生が返す。

桜花は副担任制ではない代わりに、体育祭や文化祭、遠足などの行事の時は

その学年の教科担当の先生が、全員参加する。

だから、2年担当の檜橋先生と頼人さんも、今日は一緒にこの公園に来ていた。

午前中はクラス毎のオリエンテーリングだから

お昼を食べた後、待ち合わせをしてるんだ、とちよつと照れながら言っていた。

そしてさっき、こっそりと彼の待つ場所へ向かったのだ。

ちよつとだけ…私に申し訳なさそうな気まずそうな視線を向けた芙美に

私は、笑顔で『いつてらっしやい』と言って背中を押した。だって、知ってるから。

どれだけ芙美が頼人さんを好きか。そして頼人さんもまた。

そんな2人には、本当に幸せでいて欲しいと願っているから。

だから、私に気なんて使わなくてもいいんだよ、って。

芙美はちよつと照れくさそうに、でも嬉しそうに『ありがと』と頷くと、彼の元へと向かった。

私と檜橋先生は、ただ桜の木を見上げていた。

——私の方は文字通り、本当に“見上げていた”だけ。

隣にいる先生の気配に心臓は高鳴りっ放しで、それに気付かれないように平静な振りして

桜の木を見上げているのが、精一杯だった。

2人の間にあるのは、沈黙。時間が止まったのかと錯覚させるような――。

でも何故か、私にはそれが全然嫌なものではなくて、緊張はするけど、心臓はドキドキ高鳴りっ放しだけ。他の人に感じる、沈黙の気まずさみたいなモノは少しも感じなかった。

どのくらいそうしていただろうか。

私のポケットからブルブルと振動を伝える音で、2人の間にまた時間が流れ始めた。

ポケットからその振動の発信源の携帯を取り出すと、1通のメール。『どこにいる？』――芙美からだった。

どうやら、頼人さんとの逢瀬が終わったらしい。

私は携帯を畳むと、先生の方に向き直った。

「芙美からでした。私、そろそろ行きますね」

「ああ。俺はもう少しここで見ていくから」

そう言っていると、檜橋先生は私に向けていた視線をまた桜の木に戻した。

「それじゃ…失礼します」

軽くペコツと頭を下げると、桜並木の方へ向かって歩き出す。

「――藍澤」

数歩歩いた所で、不意に後ろから呼ばれて、心臓がドクンと跳ねた。振り返ると、こちらをまっすぐ見つめた先生の顔。

さっきより少し距離があるけど、その視線に私の心臓はどうにかなりそうだった。

「――さっきの、わかるよ」

「……え？」

「1本だけ立つてる桜が好きだ、ってやつ」

そう言つて、先生はさっきまで2人で見上げていた大木を指差す。

「俺も同じ事思つてたから」

今までにないくらい大きさで、心臓が跳ねた。

このまま止まってしまうのではないかと思う程に。

—— 彼が笑つたから。

とても優しい顔で。

いつものあの鋭い視線がどこかに身を潜めて、代わりに見せた柔らかい笑み。

心臓をギュツて掴まれたように、苦しくなった。

「ほら。早く行かないと……芙美ちゃんが待つてるんだろ」

先生を見つめたまま止まってしまった私に、彼が小さく笑いながら言う。

「……あ、はい。えっと……じゃあ、失礼します」

踵を返して、歩き始める。

でも心臓の高鳴りはいつまで経つても一向に落ち着いてこない。

先生の笑顔が頭にこびり付いていて、その度に私の心臓は忙しなく脈を打つ。

深呼吸をしても、まったく落ち着こうとしない自分の心臓に

彼から見えない所まで歩いてきた後、苦しくなって足を止めた。

—— そして気付いてしまった。

自分の気持ちに。

彼が、檜橋先生が好きだ、と。

恐らく、始業式の日——あの桜の木の下で彼に目を奪われた時、同時に心も奪われたんだ。

視線を外す事も身動きをとる事も、息をする事すらもできなかった

あの時に。

彼の視線がまっすぐ桜の木に注がれていた事に、もどかしくそして悲しく感じたのは

彼への恋情からによる嫉妬――。

あの時、彼の視線を独り占めしていた、あの木に嫉妬をしていたのだ。自分は。

自分もあの視線の先に入りたい、と。

自分の気持ちに気付いた今、動悸は納まるどころか、余計に早く打ち続ける。

ただどいつまでもこんな所にいたら、先生に見つかってしまつかもしれない。

その時、何と言いついたら良いのか。

結夢はひとつ大きく深呼吸をすると、桜並木の中を歩き始める。

未だ高鳴り続ける心臓を、ギュツと押さえ付けながら――。

Turn around to me 1

あんなに綺麗に咲き誇っていた花卉もとうに散って今、桜の木には青々とした葉だけが所狭しと茂っている。

そろそろ日差しも強くなってきた、少し動く冬服の厚手の生地では薄っすら汗が滲んで、暑くすら感じるくらいだ。

そんな今は、GWも終わった5月中旬。

1ヶ月と少し前、あのオリエンテーリングの日。

自覚した、檜橋先生を好きだという気持ち。

だけど、特に何の進展もなく…私は彼にとって大勢いる生徒のうちの1人のまま。

先生の担当は、数学。

体育とか芸術選択と違って、数学は毎日ある。それが嬉しい。

先生の授業は、評判が良かった。

授業中に冗談を言ったり、脱線して話し始めたり…なんて事はなかったけど

とてもわかりやすかったし、理解してない生徒には嫌な顔1つ見せずに丁寧に教えてくれた。

もちろんあの容姿だから、女子からは別の意味でも評判が良かったけど。

『何組の誰々が檜橋先生に告白した』なんて噂は、もう何回くらい聞いただろう。

その度に、今度こそ先生はそれを受け入れてしまうのではないかと心臓の締め付けられる思いがした。

私には告白なんて、そんな勇氣はないから。

今まで好きな人ができても、告白なんてとてもできなくて

その人が誰か他の人と思いを通わせるのを、ただ見ているだけだった。

それに今、私が好きなのは“先生”。

生徒である私なんて受け入れて貰えるわけがない。

——そう思いつつ、他の子が先生に告白したって話を聞くと、不安でたまらなくなるんだけど。

今の私にとって1日1時間ある数学の授業だけが、唯一先生に逢える時間。

たまに校舎内で見かけたり、芙美に付き合って行った頼人さんの教室で

偶然逢ったり…なんて事もあるけど、そんな嬉しい偶然はそう滅多にない。

確実に先生に逢えるのは、数学の授業だけ。

——“逢う”って言い方もおかしいけど。そんな風に思ってるのは私だけだから。

先生はただ、自分の受け持っているクラスで授業をしているだけ。

今日は、もうすぐ始まる3時間目が数学の時間。

チャイムが鳴って先生が教室に入ってくる時が1番ドキドキする。すぐ目の前を先生が通るから。

ふわっと香るタバコの香りに、私の心臓は毎日、壊れちゃうんじゃないかってくらい早く鼓動を打ちつける。

黒板は見辛いし冬は寒いし…今までは嫌いだった、この“1番の指定席”も

今では大好きな席になっていた。

席替えなんて、ずっとしなくていいのになあ…。

そんな事を考えていたら、チャイムが鳴って先生が入ってきた。

教壇に向かって歩く先生のスーツからふわっと香るタバコの香り。

今日も変わらずドキドキ心臓が煩くて、頬が赤くなってしまうってんじゃないかと

自分の頬を両手で押さえた。

週番が号令をかけて、先生がグルリ、と教室内を見渡す。

その後、私が2番目にドキドキする出席取り。

「藍澤」

「はい」

たったそれだけのやり取りだけど、私の心臓はドキドキしつ放し。

緊張で声の上擦らないように、注意して返事を返す。

全員の出席を取り終えると、授業が始まる。

先生のよく通る声は、耳に心地良い。

チョークを持つ手も、教卓に置いた教科書を見る時に少し伏せる長い睫毛も

何もかもが、私の鼓動を早めてならない。

毎日毎日これじゃ、そのうち私の心臓は止まってしまつかも。

カタン、とチョークを置く音が聞こえ、黒板に向かっていた先生が生徒の方へ向き直る。

それに合わせて、私は教科書に視線を落とす。もうクセになってしまった、この動き。

先生がこちらを向いている時は、私は教科書を読んでる振りをしたりノートを書いてる振りをする。

だって、もし目が合ってしまったら？

嬉しいけど、どんな顔をしたら良いのかわからない。

そもそも、授業中に教師と目が合ったらどんな顔しよう、なんて悩む方が

おかしいんだろうけど。

「じゃあ中間に出す单元まで終わったから、あとは自習。わからない所があつたら聞きにくるように」

そう言つて自習用のプリントを配ると、先生は教卓の椅子に腰を下ろす。

教室内が俄かにザワザワし始めた。

そうだった。来週からは中間テストが始まる。

2年生になって最初のテスト。忘れてた訳じゃないけど、知らず溜め息が零れた。

椅子に座って本を読み始めた先生をチラッと見てみる。

窓側に背もたれを向け、こちら側を向いて座ってる。

組んだ足が長いなあ。

でも…残念。これじゃ先生を見る事ができない。

だって、先生が本から視線を上げたらバツチリ目が合ってしまう場所に私の席はある。

仕方なくプリントに視線を落とす。

先生に教わるようになって初めてのテストで、悪い点を取る訳にはいかない。

少しでも良い点を取って、先生に良い印象を持って欲しい。

でも…数学は正直言って得意ではなくて

1年生の時は、平均点より少し下くらいが、いつもの私の点数だった。

だけど。今年は檣橋先生に教わってるからっていう、ちょっと不純な理由ももちろん含まれてるけど

でも去年より、しっかり授業も聞いているし。俄然、数学に対するやる気が違う。

心の中で『よしっ』と気合いを入れると、改めてプリントに向かった。

——が、そんな私の気合いも虚しく、すぐに行き詰まってしまった。例えば、問題がそのまま数式で出ていれば、それなりに解けるんだけど

それが文章になると、途端に難しく思えてしまう。

私の文章読解能力に問題があるのかもしれないけど。

1人であれこれ数式に当て嵌めたりしてみただけど…私の頭にはちん

ぶんかんぶん。

仕方なく、クルリと体ごと後ろを振り向く。

「ねえ、芙美……」

同じようにプリントと睨めっこしてた芙美に声をかける。

芙美は、私と違って数学の成績が良い。

…と言うか、全体的に私より成績が良いんだけど。

「ん？どうしたの？」

私のちよつと情けない声に、彼女はプリントに落としていた視線を上げる。

「うん、あのね？この問題なんだけど…ちよつとわからなくて…」
そう言つて芙美の前にプリントを置いて指を指す。

私の指した問題をチラツと見た芙美は、にっこりと擬音がしそうな笑顔を貼り付けて顔を上げた。

「…え？」

「結夢？この問題わからないの？」

「え…、う、うん…」

う…なんかその笑顔ちよつと怖いっていうか…。

「さつき燈吾先生、なんて言つてたっけ？」

「……………」

「『わからない所があつたら聞きに来るように』…そう言つてたよね？」

相変わらずにっこりと笑つて芙美が言う。

う…それは確かにそう言つてたけど…。

「ほら。さつさと行く！」

そう言つて芙美が先生のいる教卓の方をびしつと指差す。
私の気持ち知ってるくせに…芙美の意地悪……。

「うー…でも先生忙しそうだし……」

そう。さつきから先生の元には生徒が入れ替わり立ち代り質問に行つてる。

女子が多いような気がするけど…そこはあえて気にしない事にする。

「何言つてんの。そんなの気にしてちゃダメ！あ、ほら。今チャンスみたいよ」

芙美の言葉にチラッと先生を見える。確かに今はちやうど誰もいないみたいけど…。

「うー…でも……」

「ウダウダ言つてないで、さっさと行つてらっしゃい！」

プリントを私に押し付けると、行けとばかりに手の甲をヒラヒラさせられた。

どうやら芙美は何を言つても教えてくれる気はないらしい。仕方なく私はプリントを胸に抱くようにして席を立った。

Turn around to me 2

指が長くてちよつとゴツゴツしてて…男の人らしい手だなあ、なんて。

目の前でスラスラと動く手をぼうつと眺めながらそんな事を考えていた。

「藍澤？聞いてるか？」

——と、突然聞こえてきた声に我に返る。

「あ、はい。聞いてます。…すみません」

…そうだった。

芙美に背中を押されて、先生に質問に来たのはついさっきの事。

問題の解き方を説明しながら、プリントの上をスラスラと走る、ペンを持った先生の手につい見惚れてしまつて危うく説明を聞き逃すところだった、なんて

言えない。

「——で、ここで求めるのは $a < 2$ とする時の x の値だから…」

表情を幾分か引き締めてプリントに向き直した私を確認すると、先生はまた説明を続ける。

私は、また先生の手に行つてしまいそうになる視線をなんとかプリントに向けて、

その手が導き出す解法を必死に目で追う。

いつもは、先生が通り過ぎる時にふわつと香るだけの彼のタバコの香りも、今はすぐ傍にある。

それだけで、さっきから私の心臓はドキドキとものすごいスピードで脈を打っていた。

でも今は問題に集中しないと…。

「——これで $\times$ の値が出る。…わかった？」

プリントから視線を上げた先生が、聞く。

「…はい。大丈夫……だと思います」

はつきり断言できないのが、ちよつと悲しい。

確かに今は理解できた。

先生の説明はわかりやすく、彼の手が導き出す式でその答えに辿り着くのはわかった。

でも…。これが1人で最初からこの問題に取り組んだ時、スラスラと解けるか、と問われたら

できる、と即答できないのが、悲しいところだった。

これは完全に、私の頭の出来の問題なんだけど。

「——もう1回説明しようか？」

「あ、いえ…！大丈夫、です。ありがとうございます」

もしかしたら私は難しい顔をしていたのかもしれない。

もう1度シャープペンを手に取った先生に慌てて言うと、先生が小さく苦笑した。

「まあ、またわからなくなったら、いつでも聞きに来ていいから」
そう言ってくれた先生に、もう1度『ありがとうございます』と頭を下げると同時に

授業終了を告げるチャイムが鳴った。

「じゃあ今日はここまで。号令はいいよ」

教室内を1度グルリと見渡してそう言うと、先生は教室から出て行った。

——そして金曜日。

来週の月曜から中間テストが始まる。

私は数学でどうしてもわからない問題があったけど

とうとう今日まで質問に行くチャンス逃してしまっていた。
どうしようかな、とちょっと迷って。

でも、芙美にも『先生に質問に行け』ってせつつかれてたし
私自身、やっぱり初めての先生のテストで少しでも良い点を取りたい
という気持ちがあつたから

いつも一緒に帰ってる芙美には先に帰ってもらって
放課後に1人、先生に質問に行く事にした。

教科書とノートを持つと、私は先生の教官室^{へや}に向かう。

先生が教官室にいるかどうかはわからないけど、櫻花の先生達は1
人1人に教官室^{へや}が

与えられているせいか、職員室より教官室にいる先生の方が多い。
それにどっちにしろ、テスト前の今、職員室は生徒立ち入り禁止だ
し。

教官室は、教科棟と呼ばれている職員室や音楽室・実験室などがある
棟の、上から2つの階にある。

その中でも先生の教官室がある数学科は1番上の階だった。

ほとんどの生徒が下校して、ひっそりと静まり返った教科棟の階段
を1人で上って行く。

先生の教官室は5階の1番右奥の部屋。
5階まで着いて——足が止まった。

先生の教官室の前に誰かいたから。

私は咄嗟に階段を1段下りて身を隠す。

誰だろう。髪が長かったから女の人には間違いない。

制服じゃなかった気がするから、誰か他の先生だろうか…。

別に、先生の教官室に他の先生がいてもおかしくない。

何か用事があつて来ているだけかもしれないし。

そう思いながらも、心臓がドキドキと音を立てる。

いつもより早く打つ脈に、苦しくなる。

私はドキドキうるさい心臓を片手で押さえながら、顔だけ出してそ

の訪問客を見た。

——立川先生。

その人が誰なのか、すぐにわかった。

先生や頼人さんと同じで、今年大学を卒業して赴任してきた新任の先生。

始業式の日、彼女も壇上で挨拶をしていたから間違いない。

年下の私が言うのも変だけど、雰囲気のかわいい先生で、男子生徒から人気があつたし

同じクラスの男の子達も『かわいい』と騒いでいたから、なんとなく私も知っていた。

でも確か……立川先生は1年生の英語科の担当だったはず。なんで？

なんで1年生担当の、それも英語科の立川先生が、檜橋先生の教室に来るの？

どくんどくん、と私の心臓はさらに大きく音を立てる。

ここから立川先生のいる所——檜橋先生の教室の前——までは少し距離がある。

だけど……耳に痛いくらいの静寂に、自分の心臓の音が彼女に聞こえてしまうのではないかと

私は無意識のうちに、さらに強く自分の心臓を押さえていた。

——と、ゆつくりと教室のドアが開いた。

中から顔を出したのは、もちろんあの部屋の主である、檜橋先生。彼の顔を見て微笑む立川先生。

——その顔は、私が見てもわかるくらい“恋する女”の顔だった。心臓は未だどくんどくと大きく脈を打ち、喉もカラカラに渴いてる。

先生は開け放したドアに凭れるように寄りかかって、彼女と話をしている。

腕を組んで少し俯いた彼の表情は、ここからは見えない。

彼は今、どんな表情をしているのだろうか――。

あの、オリエンテーリングの時のような、優しい顔をしているのだろうか。

そう考えた途端、息苦しくなって、涙が出て来そうになる。

こんな場面なんて見ていたくないのに……早くこの場を去らなきゃって思うのに……。

私の足は本来の役目を忘れたかのように、その場から動こうとしないでくれない。

しばらくして、榎橋先生が少し顔を上げて何か言つと

嬉しそうに微笑んだ立川先生が――彼の教官室^{へや}に入つて行つた。ドアがパタンと……彼らと私を遮断した。

ここから2人の会話は聞こえなかったが、彼が立川先生を招き入れた事には間違いない。

もしかしたら、2人は同僚教師だし、仕事の話をしているだけかもしれない。

――でも、そう思い込もうとしても、どうしても別の考えが浮かんでしまふ。

だって、あの立川先生の、彼を見る表情は“同僚教師”を見るそれじゃない。

それは、恋愛経験の乏しい私にだってわかるくらいだった。

そして、そんな彼女を受け入れて自分の部屋に招き入れた先生――。

私は空気の抜けた風船のように、へなへなとその場に座り込むと

彼らが消えたドアをしばらく呆然と見つめていた。

Turn around to me 3

——ガチャ。

遠くで聞こえたドアが開く音で、意識が覚醒する。

私は緩々と立ち上がった。

どのくらい座り込んでいたのか——外は少し汗ばむくらいの暑さだというのに

ひんやりと冷たい階段に直に座り込んでいた私の体は、少し冷えていた。

やがて近付いてくる人の気配。

こんな所にいたら不審がられるかもと一瞬思ったけど、今さら身を隠す所なんてない。

ふわっと漂ってくる甘い香水の香。

角を曲がって、私がいる階段に姿を見せたのは、立川先生だった。

私を見て一瞬驚いた顔を見せた彼女は、次の瞬間には教師のそれになっっていた。

大人の女性の雰囲気を持ちながら、かわいらしい人。

ふと、彼女がさっき先生に見せていた“女の顔”を思い出し、胸がズキンと痛くなる。

「こんな所で、どうしたの？」

「…あ、あの私、ちょっと…テスト範囲でわからない所があつて…それで…」

自分ですら忘れかけていた“ここにいる理由”を、少ししどろもどろになりながら答える。

ただど彼女は、そんな私の態度もさして気にならないように

「そう。あまり遅くならないようにね」

そう言つて“教師の顔”で微笑むと、階段を下りていった。

——そうだ。私は数学でわからない所を聞きに来たんだ。

私は緩く頭を振ると、重い足でノロノロと歩き出す。

正直、さっきの場面を見たすぐ後に、先生に逢うのは辛い。

だけど、私の足は重い足取りながらも、教官室に向かうのをやめなかった。

この時帰らなかった事を、後で後悔するとは思ってもせずに……。

教官室の前に立つと、深呼吸を数回して……それでも治まらない動悸に胸の辺りをギュツと押さえる。

一瞬、頭の中を掠めた先程の光景に、ノックをする為に上げた腕を下ろしそうになったが

なんとか奮い立たせて、コンコンとドアを叩く。

暫くすると返事と共にドアが開いた。

「——藍澤？どうした？」

訪問者が私だとわかると、先生は少し驚いたような表情をした。

「あ、あの……ちょっとわからない所があつて……」

「ああ。質問？」

「はい。……いいですか？」

「いいよ、入って」

先生は開けたドアを片手で押さえると、私に入るように促す。

「……失礼します……」

私は小さくお辞儀をすると、教官室に入る。

初めて入った先生の教官室^{へや}。

頼人さんの教官室と作りは同じなんだけど……やっぱり違う感じがする部屋。

部屋中に先生のタバコの香が充満している。

——そして、甘い香水の香も。

一瞬にしてさっきの光景が鮮明に蘇える。

先生を見て微笑む彼女の“女の顔”。そんな彼女を部屋に入れた先生。

そして、先程階段で会った時の彼女の甘い香水の香。
心臓が一層激しく脈を打ち始める。

「……で？質問って？」

後ろから声をかけられ、ゆっくり振り向く。

部屋中に漂う甘い彼女の香と、先生の声に……私はどうかしてたんだと思う。

「——先生、彼女っているんですか？」

気が付いたら、そんな言葉が口を突いて出ていた。

突然の私の言葉に先生が目を見開く。

「——は？」

「……立川先生、ですか？」

だけど私の言葉は堰を切ったように止まらない。

「——藍澤の質問ってそれか？……だったら、悪いけど答えるつもりはない」

「私が見たんです……っ！さっき、ここに立川先生が——っ」

「藍澤には関係ない」

鋭く冷たい瞳と声で、ぴしゃりと言われて心臓がズキンと音を立てる。

その先生の瞳を見ていられなくて、自然と顔が俯く。

「……もん……関係、あるもん……っ！」

「……藍澤？」

いつの間にか涙が溢れ出してグチャグチャになった顔で先生を見上げる。

先生は怪訝そうな、それでいてちょっと困ったような表情を浮かべていた。

そうだよ、先生が訳わからないのは当然だと思う。

——だって……私自身ですら訳がわからないんだから。
だけど高ぶってしまった感情を止める術もなく。

「先生の事が好きなんです…っ！」

冷静さを取り戻したのは、その言葉を口走った後だった。先生は目を見開いて驚いている。

私は自分の口走った言葉に愕然として、俯いた。

沈黙が2人を包む。

時計のカチコチという秒針の音だけがやけに響いて、逃げ出したくなる。

怖くて先生の顔が見れない。

今さらながらに、自分が口走った言葉が重く押し掛かる。

なぜあの時、帰らなかったんだろう。

どうしてここに来てしまったんだろう。

今さら後悔しても、時間は戻らない。

沈黙がひどく長く感じる。

いつの間にか『好き』という気持ちばかりが一人歩きして知らない間に、自分でも引き返せないくらい、先生の事が好きになつてた。

だけど…伝えるつもりはなかったのに。

数学の授業だったり、廊下で偶然だったり…そんな風に先生を見るだけで満足していたはずだった。

彼は先生で、私は生徒だから。

なのに…。立川先生が彼の前で見せた表情、そんな立川先生を部屋に入れた先生。

そして、この部屋に立ち込める甘い彼女の香に……醜い感情が顔を出した。

——“先生をとられたくない”、と。

そして感情的に口走ったあの言葉。

恥ずかしくて消えてしまいたかった。

長い沈黙の後、頭上で先生が小さく嘆息した。

その音にも、私の体は大きくビクツと震える。

「…………ごめん。聞かなかった事にさせてくれ」
少し掠れた先生の言葉に、私は目の前が真っ暗になった気がした。

Turn around to me 4

その後の中間テストは散々だった。

——あの日、どこをどう帰ったのか…気が付いたら自分の部屋にいた。

『……ごめん。聞かなかった事にさせてくれ』

先生の掠れた声が、あの言葉が耳から離れない。

自分の、感情に任せたあの行動に、情けなさが募って涙が止まらなかった。

勉強しなきゃと惰性で机に向かつて、頭に入ってくる訳もなく。ただただ時間だけが過ぎていくだけだった。

テスト返却も粗方終わり、各教科とも普通授業に戻り始める。

あんなに楽しみだった数学の授業も、今は苦しいだけ。

出席をとる時や練習問題を当てられた時、『藍澤』と私を呼ぶ先生の声に

『お前には関係ない』 『ごめん』 『聞かなかった事にさせてくれ』

——そう続けられるような気がして、私を呼ぶ先生の声に心臓が忙しなく脈を打つようになった。

以前は緊張と高揚から上がっていた脈拍が、今は“恐怖”から上がる。

先生から発せられる呆れ、困惑、咎め、そして拒否……あの日沈黙の中で感じた、それらの恐怖から。

先生が黒板に向かっていている時だけ見つめられた背中も、今は見る事ができない。

この“1番の席”も、今なら席替えに大賛成したくなるくらい、ツ

ライモノでしかなくなっていた。

先生が通り過ぎた時に僅かに香るタバコの香が、あの日の教官室を思い出してしまうから――。

今日の数学は6時間目。1日の最後の授業だった。

今となつては、毎日ある数学の授業がちよつと恨めしい。

長く感じた授業がようやく終わって、小さく嘆息する。

なんとなく後ろから視線を感じた気がして振り返ると、そこには心配そうな芙美の顔。

あの日の事を、私はまだ芙美に話せないでいた。

あの後すぐに週末、そしてテスト…と、話すタイミングがなかったから。

――いや、本当は自分のしてしまった事があまりにも滑稽に感じて話せなかったのかもしれない。

でも…あの、先生に質問に行くと言って1人残った金曜日の放課後から

週が明けたテスト初日の月曜日の、私の態度の変化に芙美は何か気付いているみたいだった。

そして、それが先生と関係があるとわかったのか、先生の話題には触れてこなかった。

だけど、決して自分から聞き出そうとはしない。

私から話すまで待つてくれる、そういう芙美の気持ちがある今の私には有り難かった。

「芙美。帰り、いつものカフェに寄つてかない？」

うまく話せるかわからないけど。

私の話を聞いた芙美の反応が怖くない、と言つたら嘘になるけど。芙美に聞いてもらいたい、と思った。

いつものカフェで、私はミルクティー、芙美はストレートティーという、いつものメニューを注文して。

運ばれて来た紅茶を少し飲んで落ち着いたところで、あの日の事を話し始めた。

途中、何度か言葉が続かなくなったり、涙が出そうになったけど芙美はただ黙って、私の話を聞いてくれた。

「……………そっか」

全部話し終えた後、芙美はポツリと言そう言った。

「…うん。今まで話せなくてごめん…」

「結夢が謝る事じゃないでしょ？…それにしても……………燈吾先生も酷いわよね」

「や、でも…先生は“先生”だもん……………私は生徒だし…」

「うん、それはわかってる。だけど、私が言いたいのはそうじゃない。く。」

『聞かなかつた事にさせてくれ』ってやつ。酷くない？』

「……………それは…」

「だって、そうでしょ？結夢はちゃんと“好き”って自分の気持ちを言つたんだよ？

…振るなら振るで、ちゃんとはつきり言ってくれた方が諦めもつくのに。」

そんな“聞かなかつた事に”なんて中途半端な言い方……………酷過ぎ」それは…確かに心のどこかで私もそう思っていた。

もつと直接的な言葉で振ってくれたら、

今すぐには無理だけど…それでも、先生を諦めて前に進めると思うのに。」

実際の今の状態は“想いが報われる”という意味では“諦め”がついてるけど

“先生が好き”という気持ちは、消えそうにもなかった。

だけど——…。

「…振られた事には変わらないよ……………」

「結夢……………」

「…あんな突然…感情的に気持ちをぶつけて…。振られるのは当た

り前だよ……」

「そんな事ないよ。私がもし結夢の立場だったら……きっと同じ事したと思う」

「……………」

「ねえ、結夢？無理して……自分の気持ちに嘘をつくのだけはダメだよ？」

「……………うん」

「私はいつでも結夢の味方だからね？」

「……………ありがとう、芙美……」

そう言って芙美に小さく笑って見せる。

うまく笑えてるかわからなかったけど、芙美は優しく笑い返してくれた。

無理して諦めなくても……もう少しの間思い続けてもいいかな。

まだ全然気持ちの整理なんてついてないし

相変わらず先生を見るのは辛いけど。

いつか自分の中で、この恋を終わらせられるまで――。

A w a r e n e s s 1

教師という職を選んだ事に、特に意味があったわけじゃない。

別に子供の頃からの夢だったとか、人に物を教える事が好きだとか

…そんな訳でもなく

聞こえは悪いかもしれないが、教師になったのは“なんとなく”

ただ“なんとなく”だった。

——まあ、正確には諸事情もあつたのだが。

けれど、そんな“なんとなく”選んだ職だとは言え

決まった時には、それなりに喜びもあつたし、今ではやりがいも感じている。

——が、計算違いな事が多過ぎた。

まず…俺や頼人と同じく、今年からここ櫻花で教鞭を振るう事になった

立川とかいう英語教師の女。

櫻花に採用が決まって、なんやかんやで顔を合わせる事が多かった。こちらは同僚教師として接していただけだが、どうやら向こうは違つたらしい。

“同僚教師”としてではなく“女”として俺を見ている、立川の目に気付いた時

はつきり態度で示すべきだった、と今では後悔している。

受け入れたわけではもちろんないが、はつきりと拒絶したわけでもない。

その、拒絶がないのを、その女は“脈有り”と見たらしくやたらと馴れ馴れしく寄つて来るようになった。

コイツには、他の教師なんて目に入っていないんじゃないかと思う。

校内では常に俺の近くにいろし、職員室でもそう。

拳句の果てには、何かにつけて俺の教官室にまでしつこく押し掛けるようになった。

さすがに生徒達の前でまで言い寄ってくるような事はなかったが。

別に俺は、女を傷付けられないフェミニストでもなければもちろん博愛主義者でもない。

むしろ、頼人や俺をよく知る友人達に言わせれば、まったくその逆。冷血人間だとか冷めてるだとか言われるのは間違いない。

それに、別に女にも困ってなかった。

言い方は悪いが、それなりに遊ぶ女もいたし。

立川をはつきり拒絶しなかったのは、面倒だったただけだ。

これから嫌でも同僚として働くのだから、毎日のように顔を合わせる。

そんな人間と、男だ女だと痴情をもつれさせたくなかった。

それに、相手も大人だ。

こちらが“同僚教師”としての姿勢を崩さず接していれば

こちらにその気がないものだとか気付くだろう、と夕力を括っていたが、思った以上に鈍い……いや、強かな女だった。

中間テストを目前に控えた金曜日の放課後。

その日も、立川は俺の教官室^{へや}に来た。

1人書類を片付けていると、聞こえてきたノックの音。

ドアを開けたそこに立っていたのは立川だった。

今さら開けてしまった事を後悔しても、時既に遅し。

仕方なく、開け放ったドアに凭れ掛かり

入れるつもりはないのだ、と意思表示を示し二言三言交わす。

だが、立川の方も引こうとしない。

このままそこで、話し続けそうな勢いだった。

こんな所では誰の目に付くかわかったもんじゃない。

仕方なく俺は、立川を中に入れた。

いい加減、立川の“女”を前面に出してくる態度にうんざりしていた俺は
中に招き入れておきながら、話しかけてくる立川を適当にあしらっていた。

それでもそんな俺の態度を気にした様子もなく、1人であれやこれやと話し続ける立川に

そろそろ我慢の限界が訪れる。

「——立川先生」

「はい？」

俺が自分呼んだ事に嬉しそうに笑みを浮かべた立川が上目遣いで視線を寄越す。

——うつつうしい。

その、男に媚びるような態度も視線も何もかもが鼻につく。

「すみませんが、そろそろ出たいので……」

それでも……あくまで“同僚教師”としての——余所行きの——自分を崩さない。

「あ、私ったら……ごめんなさい」

そう言つてソファから立ち上がった立川の、次に続いた言葉と態度にとつと我慢の限界が訪れた。

「あの、榎橋先生？良かったら……この後、一緒に食事でも……」

わざとらしく恥じらつて見せながら上目遣いで俺を見る、計算された立川の顔。

そして、さり気なく俺の腕に添えられてる彼女の手。

男なら皆、それで落ちると思つたら大間違いだ。

むしろ、俺はその手の女が大嫌いだった。

今まで付き合つた女にも、そういう女を選んだ事は1度もない。

「——悪いけど、どうでもいい女に時間を割く程、暇じゃない」
「……え？」

俺の言つた意味が一瞬わからなかったのか、きょとんとしてこちら

を見た立川の顔は滑稽だった。

「アンタと飯食う程、暇じゃないって言ったんだよ」

「な…っ」

「もつとわかりやすく言つてやろうか？アンタに興味がない。アンタを見ても何の気も沸かない」

「…なんですつて…！！」

「わかつたならさっさと出て行つてもらえます？立川先生」

真つ赤な顔して、わなわなと唇を震わせてる立川に冷たく笑つてやる。

「っ！馬鹿にしないでよ…っ！！」

怒りと屈辱の為から体を小刻みに震わせながら、そう叫ぶと

立川はドアを乱暴に開けて出て行つた。

この時程、この教官室のドアが重い扉で良かった、と思つた事はなかった。

軽いドアだったなら、立川が怒りに任せてドアを閉めれば、その音が廊下中に響き渡つて

他の教官室にいる教師達に気付かれていたかもしれない。

だが、幸いにもこのドアは重く造られていて、どんなに乱暴に扱つても

扱つた側の意思とは関係なく、ゆつたりと閉まる。

男の力ならそこそこ思い通りに扱えるかもしれないが、女の細腕じやまず無理だろう。

与えられた自分の教官室^{へや}に初めて来た時

何故こんなに重く扉を造つたのかと疑問を感じた自分が、今は感謝すらしていた。

その重い扉がゆつたりと閉まつた頃には、立川の足音はもう聞こえなくなつていた。

ドアから視線を外し、自分の椅子に座り直す。

これで立川が自分に纏わりつく事はなくなるだろう。

最初からこうすれば良かったのだ。

あの手の女は、はつきりと意思表示をしないと自分の都合の良いように解釈して付け上がる。

その判断を誤ったのは、他でもない自分なのだが…。

もう1度ドアに視線を向けると、自然と嘆息が漏れた。

A w a r e n e s s 2

「——んで？柄にもなく、振った女の事気にしちゃってるわけ？」

テスト期間も終わり、6月もそろそろ半ばに差し掛かるつかという日の放課後。

頼人がふらつと俺の教官室^{へや}に来た。

——が、来たはいいが、特に何を言うでもなく淹れてやったコーヒーを飲みながら、さして興味もないだろう資料をペラペラ捲っている。

別に俺も話す事もないし、同じようにコーヒーを飲みながら、何となく窓の外を眺めていたのだが——。

やっと口を開いたかと思えば、この台詞だ。

約束もしてないし、用もなさそうなのに、突然訪れた頼人に若干嫌な予感はしていたが

やっぱりか——と内心、小さく嘆息する。

「……………」

俺は否定も肯定もせず、ただそのまま窓の外を眺めていた。

「めずらしいな。…まあ、同僚だからこの先多少のやり難さはあるかもしれないけどよ、

あの人だつて大人だし——…」

「——どうでもいい」

“どうでもいい”と言うより、正直忘れていた。

俺にとって、立川にとつた拒絶の態度や放った台詞は、記憶に残らないくらい、どうでも良い事だった。

だから、つい反応してしまった。

——これが、コイツの“手”だと普段ならわかるのに…。

「…ふーん。——じゃあ、結夢ちゃん？」

「——！」

「当たり前？」

しまった、と思ってももう遅い。

頼人から出てきた名前に、つい反応してしまい振り返ってしまった。そんな俺を見て、頼人は満足そうにニヤニヤと笑みを浮かべている。コイツは、人当たりの良い外面に騙される奴が多いが

実際は、結構な策士というか…まあはつきり言って口が巧い。

コイツのペースに乗せられると、言わなくて良い事まで言わされてしまう。

だから、何を言われてもシカトを決め込もう、と思っていたのに――

「……………芙美ちゃん、か」

俺は小さく舌打ちをしながら、仕方なく体ごと頼人に向き直った。

「んー…正確には“興奮した芙美がついポロッと口を滑らせた”と言つか…」

でもまあ…結夢ちゃん、わかりやすいから」

芙美に聞く前から気付いてたけどね、と苦笑する。

まあ…確かに彼女はわかりやすい…気がする。

思ってる事が表情に出やすいというか、まあ素直なんだろう。

隠し事とか間違いなくできないタイプに見える。

「あの『来るもの拒まず去るもの追わず』の燈吾が、気にするなんて…」

てつきり結夢ちゃんは特別かと思ったんだけど」

「——特別も何も…生徒だろ」

「俺は“檣橋先生”には聞いてないんだけど？」

顔は笑っているのに、目は笑っていない。

相変わらずニヤついてるように見えるのに…目だけが妙な威圧感

を放ってる。

「……………」

「じゃあ、なんでちゃんと振ってやらなかった？」

『聞かなかった事にさせてくれ』だなんて中途半端な言い方して
お前らしくもない」

「……………」

コイツのペースに乗せられて堪るか。

…それに、正直、俺にだってその答えがわからないんだ。
答えようがない。

……………いや、きっと“答え”は出てはいる。

ただ、それを認められない自分がいるだけで。

別にそんな大層な道徳観念を持つている訳でもなければ
理想の教師像とか、熱い教師魂とやらとかを持つている訳でもない。
だけど…だからと言ってそう容易くできる事ではないだろ。

——生徒の気持ちを受け入れるという事は。

…頼人に言わせれば、これは“檣橋先生”の意見。

それはつまり“俺”の気持ちではない、という事だろう。

——そんな事言われなくても“俺”本人が1番わかってるんだ。
だけど、俺が教師で彼女が生徒、というのは紛れもない事実。

どうしたって“教師”としての自分が先立ってしまうのは当然だろ。

——それでも。あの時…彼女に気持ちを伝えられた時。

はつきりとした拒絶を示さなかったのは、他の誰でもない…自分。

立川には、あんなにはつきり拒絶を示したというのに。

——違う。

“示さなかった”んじゃない。“示せなかった”んだ。

その言葉が、“俺”の本当の言葉じゃなかったから。

“教師”という建前を被った俺が、“檣橋燈吾”という本音にギリ
ギリの所で勝てなかった。

だから、あんな中途半端な言い方しかできなかった。

受け入れる事はしないクセに、

『嫌いだ』とか『受け入れられない』だとか…そうはつきり言葉に
してない分

どこかで彼女の心を繋ぎ止めるような…そんな汚い言い方。
我ながら自分で自分が情けなくなる。

——— だけど。

あの時、確かに教師ではない、本音の俺が思ってしまったんだ。
目の前で俯いて小さく震えている彼女が欲しい、と———。

A w a r e n e s s 3

始業式のあの日。

別に緊張していた訳でもなければ、妙に張り切っていた訳でもないが、少し早めに着いてしまった。

今思うと、やっぱりどこか力が入っていたのかもしれない。

どうにも朝は苦手で、学生時代はいつも遅刻ギリギリ…という生活を送っていたこの俺が

“遅刻ギリギリ”どころか、むしろ“早い”とも言われる時間に出勤したのだから。

——だけど。

この桜花の一教師となったのは半月程前とは言え、その間していた事と言えば説明会だの研修だので

実際に、生徒達の前に“教師”として立つのは今日が初日。

もちろん担任クラスなど持っていなければ、授業だっではない。だから、早く出勤した所で、特にこれと言ってする仕事もなく。

職員室にいても、この独特の雰囲気はまだ慣れず

それに、研修の時から何かと付き纏ってくる同期の女教師が鬱陶しかったのもあり

新任教師が始業式の日からウロウロしているのも考えもんだったが以前魅せられてしまった、校舎裏に1本だけ立っていた桜の木を何の気なしに見に行った。

花を愛でる趣味はなくても、桜だけはなんとなく好きだった。

何本もの桜が犇めき合うようにして咲き誇っているのも圧巻だが1本だけぽつん、と立っている桜の方が、より一層興味を惹かれる。その凜とした佇まいが好きだった。

校舎の裏、裏門へと続く道を少し逸れた所。

ちょうど職員用の駐車場へと続く道にある、その木。

ここ桜花は、職員全員、車通勤しても大丈夫なんじゃないか、というくらい

充分に職員用の駐車スペースが用意されていたので

新任教師という立場でありながら、やっぱり俺も車で通勤していた。

そして今朝も駐車場から職員玄関に向かう途中、見事に咲き誇るあの木を見かけた。

あんなに立派な木だが、校舎裏のさらに逸れた所にある、というだけで途端に近づく人間が減る気がする。

むしろ、ここに桜の木があると、ほとんどの連中が気付いていないのかもしれない。

でもそれは、俺にとって好都合であるわけで。

別に人が嫌いという訳ではないが、1人になれる場所は好きだった。

——が、その日は違った。先客がいたのだ。

桜の木の下で、じつとその木を見上げている少女が。

小さくて細い体に、柔らかそうなふわふわとした髪。

楽しそうに、そしてどこか愛しそうに桜を見上げている瞳。

目が離せなかった。

その少女があまりにも綺麗だったから。

——欲しい、と思った。

容姿もちろん『かわいい』と言われる部類に入ると思うが

…そうではなくて。雰囲気というか、うまく表現できないが…とにかく“綺麗”だと思った。

正直、初めて会った女にこんな感情を持ったのは初めてだった。

だけど、『触れたい』『欲しい』と思ったのは紛れもなく本心で。

今思えば、この時俺は彼女に、俗に言う“一目惚れ”というやつをしたのだろう。

そんな経験もなかったし、今までどこか冷めた気持ちでしか女と付き合った事がなく

本気で人を好きになった事のなかった俺が、そんな自分の気持ちに気付く由もなかったが――…。

彼女は、俺が担当している2年生だったから、毎日授業で顔を合わせた。

必死にノートを取っている姿や、わからない問題があった時など百面相のようにコロコロ変わる表情に

何度教壇で1人笑いそうになった事が。

また、彼女の親友の芙美ちゃんと頼人が付き合っているという事もあって

頼人の教官室で顔を合わせる事もあった。

そうやって彼女と接していくうちに、どんどん彼女に惹かれていく自分がいた。

まさか、自分が1人の女に――しかも生徒にこんな気持ちを持つとは思いもしなかったが…。

彼女は感情がすぐ表情に出る。

自惚れと言われるかもしれないが、そんな彼女が自分に特別な感情を抱いている事は

なんとなく気付いていた。

嬉しくなかった筈はない。自分が欲しいと思っている女に想われているのだから。

だけど――自分は教師で彼女は生徒。

受け入れる訳にはいかない。

今までの女だったら、適当に付き合って、面倒になったら別れていたかもしれない。

だけど…彼女は違う。そんな軽い気持ちで受け入れられない。自分はいい。だが、彼女をこんな制約の多過ぎる恋愛に安易に引き摺り込む訳にはいかない。

それに…正直そこまでの自信や覚悟が自分自身にもなかった。だから、彼女が自分の気持ちを口にした時——好きだ、と伝えられた時

思わず抱き締めそうになったこの腕を必死に押さえつけた。そして『聞かなかった事にさせてくれ』と彼女を拒絶した。

——欲しい、と願っていたものがすぐそこにあつたのに。本当は目の前で震えている小さな体を、思い切り抱き締めたかったのに——。

「…さて。俺は帰るわ。芙美が待つてるし？」

考え耽つていた俺は、頼人の声で現実に戻された。

「……まさかお前がそこまで1人の女に嵌まるとはな」

散々言いたい事を言ってくれたお返し、とばかりにフンと鼻で笑ってやる。

「そう？」

「高校の時から散々好き勝手やってただろ。特に女関係」

コイツは俺に負けず劣らず“来るもの拒まず去るもの追わず”主義で高校、大学と一緒にだった俺は、コイツの“彼女”をそりゃあもう何人も見てきた。

それが…芙美ちゃんに出逢った途端、パタリと女遊びをやめたかと思ったら

卒業間近とは言え、まだ中学生だった彼女と付き合い始めたもんだから、あの時は本当に驚いた。

もつと驚いたのは、こと恋愛に関しては、俺と同じか——もしくはそれ以上に冷めていた頼人が

芙美ちゃんと付き合い出した途端、何ともマメな男になった事だっ

たが…。

「あはは、それ言われると耳が痛いな。…まあ、あの頃はまだ芙美に逢ってなかったから。」

——燈吾もそのうちわかるよ」

「……………どうだかな」

また自分の話に戻されるのはごめんだとばかりに、適当に返事を返す。

…そこで、ふと浮かんだ事。

何となく…そう何となく。コイツなら何と答えるだろうかって。

「——頼人。もし…芙美ちゃんと出逢ったのがここだったら、お前は——」

「何も変わらねえよ」

「え…」

「芙美と“教師”と“生徒”で出逢ってたらって事だろ？それなら答えは“変わらない”」

俺はやっぱり芙美を選んだと思う」

だから、そう即答された時に思わず言葉に詰まってしまった。

「んじゃま、帰るわ」

頼人もこれ以上、話を続けるつもりはないらしく…と言うより早く帰りたいんだろう。

鞆を抱えると、ドアに向かって歩き出していた。

「おう。…じゃあな」

「また明日な」

手だけをヒラヒラ振りながら、振り返らずに出て行った頼人の後姿とゆっくり閉まるドアを眺めながら

俺の頭には、今の頼人の言葉とこの前ここで見た彼女の泣き顔がいつまでもグルグルと廻っていた。

A w a r e n e s s 4

その日の2年5組での授業は、1つの単元が終わったので、まとめのプリントをやらせた。

授業終了を告げるチャイムが鳴り、終わった者はそのまま提出。終わらなかった者は、放課後までに提出するように言って教室を出る。

今日の5組の授業は2時間目で、放課後まで時間はたっぷりあるし余裕だろう、と思っていた。

授業と授業の間の休み時間だったり、昼休み、それから放課後、プリントが終わった生徒がチラホラ提出に来る。ほとんどの生徒が提出に来た中で、1枚だけ足りない。

——彼女のプリント、が。

わざとか？そう思って、すぐにその考えを否定する。

彼女は、そんな事をするような子では、決してない。

確かに、あの日から、彼女が俺を避けているのは明白だった。

だけど…毎日ある、俺の授業を彼女がサボる事は1度もなかった。

——たとえば、授業中にまったく目が合わなかったとしても…。

それでも、教室に入ってきた時、彼女がその席にいないという事はなかった。

だから、そんな彼女が、プリントを提出しないなんて事がある訳がない。

時計を見ると、帰りのSHRが終わってから1時間程経っていた。

どうするか、と一瞬考えて…俺は教官室（ぎょうしつ）を出た。

校庭からいつもは聞こえる運動部の声が今日はまったく聞こえない。

それもそのはず。

まだまだ明けない梅雨が、空を黒く埋めつくし雨を降らせていたから。

シンと静まり返った校舎を歩く。

いつもは大勢の声や足音で溢れている校舎も、今日は自分の足音しか聞こえない。

そりゃそうだろう。

もうSHRから1時間以上経っている。

ほとんどの生徒は帰宅しているはずだ。

2年生の教室がある階に着いた。

やはりこの階も静まり返っている。

2年5組の教室の前に立つ。

中から話し声は聞こえてこない。

やはり誰もいないのか…と思いつつ、扉を開ける。

——いた。

5組は先日、席替えをしたらしく

今の彼女の席は、窓側から2列目の後ろから2番目。

最初は、いつもの、あの廊下側の1番前の席に彼女がいない事に違和感を感じた。

席替えしたのにも関わらず、彼女の後ろの席には芙美ちゃんがいって絶対仕組んだなと思ったのは、どうやら頼人も同じだったらしい。

…その席に、彼女は1人座っていた。

いきなり扉を開けて入ってきた俺を見て、彼女は目を見開いて驚い

ていた。

彼女の机の上には、今日の授業で配ったまとめプリント。小さく嘆息しながら、彼女の席に向かっていく。

そんな俺を彼女は、ただただ驚いて、そして少し困惑しているような顔で見つめていた。

彼女の前に立って彼女とプリントを交互に見下ろす。

彼女は黙ったまま、俯いた。

「——どこがわからない？」

そう言つて、彼女の前の席の椅子を引くと、彼女の方に向けて腰を下ろした。

俺の言葉に彼女は驚いて顔を上げると、自分の目の前に座った俺を見て、さらに驚いたように目を見開いていた。

「わからない所は？」

もう1度問う。

「え……あ、あの……」

「——聞きに来れば良かったのに」

困惑顔でしどろもどろになっている彼女に、言った後でしまったと思つた。

…違う、と。

彼女が来れる筈がないだろう、と。

あの場所に。俺の教官室^{へや}に。

それでなくても俺を避けていると言つのに。

あの、俺が彼女に“教師”としての態度を示したあの場所に。彼女が来れる訳がない。

そうしたのは、俺。

紛れもなく、俺。

“榎橋先生”という、“教師”の俺。

「大丈夫、です」

俺の言葉にビクツと反応した彼女が、俯いたまま小さく言う。

「……いいから。どこがわからない？」

「あ、あの…！すみません…ちょっと考え事してたらこんな時間になっちゃって…」

でもあの、終わってるんです、プリント…」

俯いたまま早口でそう言うのと、彼女はプリントを俺の前に差し出した。

「…すみません…遅くなっちゃって…」

小刻みに震える彼女の手から、プリントを受け取る。

「——藍澤」

俺がそう声をかけた途端、ガタガタと慌てたように彼女が立ち上がる。

「あ、あの…私、帰ります！…遅くなつてすみませんでした」

そう言つて頭を下げた彼女の瞳から、一粒の涙が落ちた。

——その瞬間。

衝動的に彼女の腕を掴んで自分の方へと引き寄せていた。

彼女の細くて小さい体はすっぱりと俺の胸に入る。

あの時抱き締めたかった小さな体。

——いや、もっと前。そうあの桜の下で見た時から抱き締めたかった人。

甘い香りのする、その体。

その香りに誘われるように、グツと抱き締める腕に力が入る。

「せ、先生…！？」

戸惑ったような彼女の声で、ハッと我に返る。

——俺は何をしているんだ。

慌てて彼女の体を開放する。

「……あ、あの……」

顔を真っ赤に染めて困惑した表情で見上げる彼女と目を合わせられない。

何をやってるんだ、俺は。

あの時、彼女を受け入れなかったくせに。

教師面して彼女を拒んだくせに。

「……せ、先生……？」

今更何やってんだ。

「……悪かった。……気を付けて帰れよ」

顔を赤く染めたまま、一瞬だけ泣きそうに歪めた彼女が、走り去って行く。

俺はしばらく動けなかった。

まだ彼女の甘い香りが、柔らかな感触が、残っている。

「——クソッ」

静かな教室に、俺の声だけが響いていた。

ココロノユクエ1

ズキンズキンズキンズキン——…

どうして？

ドウシテドウシテドウシテドウシテ——…

頭の中でそんな言葉ばかり繰り返し浮かぶ。

相変わらず胸はズキンズキンと、大きな音を立てていて、痛くて苦しくて。

とまどい、困惑。

異常なんじゃないかって程に、心臓がその存在を主張している。

ズキンズキンズキン ドクンドクンドクン——…

今にも壊れてしまいそう。

バンツ、と静かな校内に大きな音が響く。

机の横に掛けてあった鞆を掴んで、夢中で走った。

下駄箱まで止まる事無く走って走って…見えたそれに、その勢いのまま両手をつく。

静まり返った校内では、思った以上に大きな音となって響いた。

両手をついた態勢のまま、大きく肩で息をする。

だけど、うまく呼吸ができない。

頭から足の先まで、ドクンドクンと苦しい。

まるで体全体が心臓になったかのようで。

その鼓動に合わせて、体中にチクンチクンと痛みが走る。

——泣くつもりなんてなかったのに…。

帰りのSHRになっても、プリントは終わらなかった。

元々、苦手な数学。

2年生になって、先生に教わるようになって、少しは頑張っていたつもりだけど

それでもだからと言って、急に得意になるわけはなく。

1人、また1人とプリントを終えて提出しに行く子達を横目で見ながら

一生懸命、プリントと向き合う。

あんな事があったからと言って、数学を投げ出したりしたくはなかった。

最初は“先生の担当教科だから”という不純な動機だったけど今では少し数学が好きになっていたし。

でもやっぱり一番は…

これ以上、先生に呆れられたくない。

これ以上、みつともない姿を晒したくない。

その想いからだった。

提出に行く先は先生の教官室^{へや}。

心配そうな顔をした芙美が、自分も一緒に残るって言うてくれたけど今日は頼人さんの家に行くんだって知っているから。

この春から“教師と生徒”になってしまった2人が、

今までみたいに、周りを気にせず一緒にいらなくなってしまった事を

すぐ傍で見えていて知っているから。

そんな2人の間を、私の我儘で邪魔したくない。

『大丈夫だから、早く帰って？』と笑って見せた私に

『いいの！結夢の方が大事！』って眉を寄せていたけど

芙美の背中を押して無理矢理ドアから押し出した。

もちろん、大丈夫だと笑顔を作るのを忘れずに。

最後まで『残る』と言い張った芙美も

結局は私に根負けして、眉を寄せたまま、渋々帰って行った。

それから暫くして。

時間はかかってしまったけど、どうにかプリントを終わらせた。だけど……提出しに行く勇氣がなかなか出なくて。

あの場所に行くのが怖くて。

あの、醜い嫉妬から、みつともない姿を晒して先生に拒絶された場所。

何度も行かなくちゃと気持ちを奮い立たせようとしてもどうしてもこの足は一步を踏み出してくれなくて。

プリントを見つめたまま、視線すらも上を向いてくれなかった。

『……ごめん。聞かなかった事にさせてくれ』

耳の奥にこびり付いた様に、離れない先生の言葉。

それと同時に煙草と香水の混じった香りが、今でも鮮明に残っている。

立川先生が彼に見せた顔も、彼が彼女を教官室^{へや}に招き入れた姿も、その香りも、彼の拒絶の言葉や声も——…

私の心はすべてを克明に記憶していて。

先生の所へ行かなくちゃと思う度に、その記憶を鮮明に呼び起こす。頭は体に動けと指示しているのに、心がそれを拒否する。

自分の体が、まるで自分じゃなくなったかのように動かなくて椅子から立ち上がる事すらできないまま、ただただプリントを見つめていた。

どれくらいそうしていただろう。

気付けば辺りは薄暗くなり始め、さつきまであった人の声もなくなっていた。

時計を見ると、SHRが終わってから1時間が経っている事に気付く。

窓の外では相変わらず雨が降っていて

それがより一層、薄暗さを強調している。

——行かなくちゃ。

また怖気付いてしまいそんな目一杯奮い立たせて、立ち上がる

うとした時——…

ガラス、とドアが開いた。

そこに立っていたのは——…今、私が行かなくちゃと思っていた部屋の主である、先生だった。

ココロノユクエ2

突然の事に、言葉が出なかった。

久しぶりに先生の顔を見た気がする。

——少なくとも、あの日以来、初めて交わった視線。

小さく嘆息すると共に、先生の足がこちらに向かって歩き出したのを見て、思わずビクツと体が揺れた。

先生は私の前まで来ると、私とプリントとを交互に見下ろした。たまらず、視線が落ちる。

だけど。私の目の前の席に座った先生に驚いて、落ちた視線がすぐに上がる。

『——聞きに来れば良かったのに』

先生のその言葉にドクンと心臓が大きく鳴ると同時に、体が大きく揺れた。

あの日の光景が鮮明に蘇る。

『……ごめん。聞かなかった事にさせてくれ』

目の奥が熱くなってくる。

…泣いちゃダメだ。

下を向いたまま、涙が落ちてしまわないように必死に歯を食いしはる。

だけど。こらえようとすればする程、その滴は溢れそうになって。

プリントを差し出した手が、震えてしまった。

「——藍澤」

呼ばれた名前に、いよいよ涙が零れて落ちそうになって、慌てて立ち上がる。

あと少し。あと少しだったのに…。

ぺこりと頭を下げた時、一粒の滴が零れて落ちて、机に丸い染みを

作った。

——瞬間

何か強い力に引っ張られて、気付けば目の前には濃いグレーの世界が広がっていた。

そしていつもより強く感じる、先生の煙草の香り。

『抱き締められている』と気付いたのは、一瞬の間の後。途端、頭の中がパニックに陥る。

心臓はバクバク、頭には“？”の羅列。

——ドウシテ？

夢なのか現実なのかもわからなくなってくる。

これは、私の願望が見せた夢なのではないか。だって、こんな事あるわけない。

——先生に抱き締められるなんて。だけど。

先生の香りや温もり、力強い腕は確かにすぐそこにあつて。

先程、堪え切れずに零れてしまった涙も、いつの間にか止まっていた。

——と、急に先生の腕に力が籠る。

「せ、先生……！？」

苦しい程の腕の力に思わず声を上げると、突然解放された上に先生が一步下がった事で、

今まで彼に凭れる様に抱き締められてた体が、反動でよろけそうになった。

急に自由になった体と、なくなってしまった温もりに、少しの淋しさを感じると同時に

“抱き締められた”という事実が急に現実味を帯び始め、自分でも顔が赤くなるのがわかる。

……だけど。

私を解放した彼は眉を寄せて横を向いてしまい、その表情は横顔しか見えない。

なんだかたまらなく怖くなって。先生にこっちを向いて欲しくて。

「……あ、あの……」

今もし視線が交わったとして、どんな顔して良いかわからないのに。

「……せ、先生……？」

でも。

次の彼の言葉で、自分がいかに馬鹿だったか思い知らされた。

“そんな筈ない” “受け入れて貰える訳ない” そう頭では思っていないながら

心のどこかで、もしかして……って思う自分がいて。

抱き締められたからって、どこかで期待してる自分がいて。

……私って本当に馬鹿だな。

—— そんな訳ないのに。

「……悪かった。……気を付けて帰れよ」

ガツン、と殴られたような、そんな気がした。

さっきまでの事がやっぱり夢で、今が現実なんだって突き付けられたように。

“勘違いするな” “受け入れられない” って言われてるようで。眉を寄せて顔を逸らしたままの先生が、私の想いを全てを拒絶してるようで……。――

……だったら、どうして……？

—— どうシテ ダキシメタノ？ ——

気が付いたら、走り出していた。

もう1秒だって、先生の前にいたくなかった。

—— ……いられなかった。

……もうこれ以上、先生の顔を見るのも、言葉を聞くのも怖かったから。

あの日の事がまだこの胸から消えてくれないというのに。
もしまた、先生に拒絶の言葉を言われたら…？

…私はそんなに強くない。

だから逃げた。先生の前から。

ドクンドクンと心臓が煩い。

イタイイタイ クルシイクルシイ って体中が叫んでる。

振り向く事も止まる事もせず、ただ只管走った。

先生から逃げるように。

——… 自信の痛みから逃げるように。

もう頭の中がぐちゃぐちゃだった。

ココロノユクエ3

「——ねえ、結夢。…ホントに大丈夫？」

「…ん。平気」

両手を団扇代わりにしてパタパタ仰いでくれながら、心配そうに見つめる芙美に

笑顔を作って見せる。

「もうっ。そんな無理する事ないんだよ？」

…けど、どうやらその笑顔は余計に芙美を心配させただけだったみたい。

「あっちで休憩してたら？」

そう言つて芙美が指差したのは、グラウンドから少し離れた木陰。数人の先生達が涼んでるのが見える。

それに対して今、私達がいるのは、じりじりと照り付ける太陽を遮る物など何もないグラウンド。

——そう。

明日は体育祭という事で、今日は各クラス最後の追い込み練習だったりする。

もちろん我が2年5組も例外ではなく。

今は、体育祭の最後に行われるクラス全員参加の『クラス対抗リレー』の練習中。

…と言つても、トラックでは他のクラスも同じように練習してるからその一部を使つて、バトンの練習をしてるだけだ。

私と芙美がいる場所から少し離れた所で、頼人さんがクラスのみんなにバトンの指導をしている。

ああやつて見ると、頼人さんって先生と言つよりお兄さんみたい。

櫻花では、学年の教科担当教師が、行事毎にその学年に参加する。体育祭では、教科担当の先生達が各クラスに振り分けられていて

私達のクラスには頼人さんが入った。

最初のうちは芙美もすごく喜んでいたけれど、

こうやって頼人さんが他の子と楽しそうにしている所を見ると
やっぱり複雑みたいで、なんとなく元気がないようだった。

クラスのみんなから少し視線をずらすと、他のクラスの子達が練習
してるのが見える。

――そして、その輪の中で男子にじゃれ付かれながら何かを話し
てる檜橋先生も。

先生は1組なんだ…。

何を話しているのかまでは聞こえないけど、1組の子達の楽しそう
な笑顔に

時々聞こえてくる、女の子達の高い声。

みんな嬉しそう…。

先生は『クールなところがかっこいい』なんて言われてるけど

本当はすごく面倒見が良くて優しいから、男子にも女子にも人気が
あるんだろうな。

またスキンスキンと痛み出しそうな心臓に

気付かない振りをするように、無理やりクラスのみんなの方へ視線
を戻した。

「ホント暑いねー…」

体操着の裾をパタパタしながら、眉を寄せて芙美が言う。

今がまだ梅雨だって事を忘れそうになるくらいに、

今日は朝から、燦々と太陽が照らしている。

そこに梅雨特有のジメジメと肌に張り付く様な湿気も相俟って、か
なり蒸し暑かった。

「…ねえ、ホントに大丈夫？」

眉を寄せてこちらを見る芙美に小さく笑う。

本当は大丈夫じゃなかった。

ちょっと――いや、かなり体がだるい。

何をしていてもあの時の事が頭から離れなくて

グルグル…出口のない迷路に迷い込んだかのように

あの時の先生の腕の強さや香り、そして言葉が浮かんで

苦しくて切なくて痛くて…食欲も出ず、眠る事もほとんどできない
日が続いていた。

その上、この暑さと日差しで、正直言つと立っているのもやっとな
った。

——でも。それでも。

先生を好きな気持ちが変わらない私は、やっぱり救いようがないん
だろうか。

嫌いになろうとして嫌いになれるものじゃない。

諦めなきゃと思つても、そう簡単に好きな気持ちは消せない。

人を好きになるって、理屈じゃないと思う。

…そう気付いたのは先生を好きになつてから、だけど。

今まで誰かを好きになつても、その人に他に想い人がいたり

その人の事を誰か他の子が好きだったりすると、すぐに引いてしまい
いつの間にか恋心も消えていた。

そしてそれをどこか『仕方ない』と思う自分がいた。

好きな人に想われている人に対して、“羨ましい”という気持ちは
あつても

“嫉妬”というものをした事はなかった。
なのに。

あの日、立川先生に感じたのは、紛れもなく“嫉妬”。

そして…みつともない姿を晒して、先生に拒絶された。

あれだけ醜い感情を曝け出してみつともない姿を晒して拒絶された
のに

それでもまだ私は、先生が好きでたまらない。

こんな気持ち知らなかった。

こんな、苦しくて痛くて切ない恋なんて知らない——…。

「結夢—芙美—！サボってないでやるよ—？」

少し離れたクラスの輪から、クラスメイトの奈津子に呼ばれた。

「…仕方ない、行こっか」

「……そだね」

ハーフパンツに付いた砂を払いながら立ち上がった芙美に返事をしながら自分も立ち上がる。

瞬間。グラッと視界が揺れ、吐き気がした。

「…ちよつと、結夢？ ホントに大丈夫？ 顔色悪いよ？」

「あー…うん。平気」

緩々と首を振って小さく笑みを作る。

「ホントに？ もう、無理しないで辛かったら保健室行きなよ？」

「…うん、ありがと」

芙美と並んでみんなの方へ歩き出す。

じりじりと照り付ける太陽と肌に張り付く様な湿気が作り出す熱気に暑い筈なのに、何故か『寒い』とすら感じる。

頭の中に靄がかかったようで、気持ち悪くてグラグラして背中に冷や汗が流れ落ちる。

体中の血液が一気に足元に抜けて行くような感覚に陥った瞬間——…目の前がそれまで以上に大きく揺れたかと思うと真っ白になり崩れ落ちるように膝をついてしまった。

「…え…っ！？ ちよつと…結夢！？ ねえ、結夢！ 大丈夫！？」

頬に当たる砂の音と感触、それから悲鳴のような芙美の声が遠のいて行く意識の中で薄らと聞こえる。

「結夢！…結夢っ！」

起きなきゃ…『大丈夫だよ』って起きなくちゃ——…。

だけど、体が重くて、意識が朦朧として。指1本ですら動かせない。

今にも手放してしまいそうな意識を一生懸命 手繰り寄せようとす
るけれど

それすらもうまくいかない。

不意に、体が宙に浮く様な感覚を覚える。

力強い腕に、あの香り。

——ああ。あの日の事ばかり考えていたからかな。
だから、あの——先生の——腕と香りの、夢……か
幻想を見ているのかも。

だとしたら……どうかこのまま。

この先はどうか思い出させないで——……。

悪夢に突き堕とされる前に
私は意識を手放した——……。

ココロノユクエ4

誰かがボソボソと話す声と、それから扉の閉まる音で目が覚めた。効き過ぎな位に冷房の効いた部屋に、背中の硬い感触。

そして、微かに薬品の匂い。

ここが保健室だとすぐにわかった。

…でもどうして私はここにいるんだろう。

ベッドの上で上半身を起こして座り、辺りを見回してみる。

カーテンが閉まっているから、何も見えないんだけど…。

「——藍澤？入るよ？」

「あ、はい…」

聞こえた声に反射的に返事をする。

「起きてたんだ？結夢ちゃん」

仕切りのカーテンを身一つ分だけ開いて中に入って来たのは頼人さんだった。

頼人さんは、授業中はもちろん、周りに誰がいる時は私の事を“藍澤”と呼ぶ。

それ以外は“結夢ちゃん”なんだけど。

「…峰岸先生」

頼人さんが“結夢ちゃん”と呼んだという事は、もしかしたらこの保健室には

私達の他に誰もいないのかもしれないけど、念の為“先生”と呼んだ。

「誰もいないから、いつも通りでいいよ。木下先生も今ちょっと出てるし」

木下先生というのは、優しい気な外見にそれに違わない優しい雰囲気を持った

40代半ばくらいの保健医の先生。

お母さんみたいな先生で、生徒にも人気がある。

さっきの話し声は頼人さんと木下先生だったのかな。

優しく微笑む頼人さんに少しホッとして、先程からの疑問を口にした。

「あの…頼人さん、私どうしてここに…？」

「ん？覚えてない？倒れたんだよ、結夢ちゃん」
倒れた…？

確か今日は、明日の体育祭の練習をしていて…。

グラウンドでクラス対抗リレーの練習をしていたはず。

それで…クラスメイトの奈津子に呼ばれて、芙美と一緒にみんなの所に行こうとして…。

——そうだ…。

体中の血液が足元に落ちて行くような感覚と、激しい眩暈に襲われて頬に当たる砂の感覚と芙美の声に、遠退いて行く意識を必死に手繰り寄せようとしたけど

それは失敗したみたいで。…次に気が付いたのが保こ健室このベッドの上だ。

「軽い栄養失調と睡眠不足だって」

「っわ…っ！」

少し屈む様にして顔を覗き込んできた頼人さんに

記憶の糸を必死に手繰り寄せようとしていた私は、ビックリして思わず大きな声を出してしまった。

「まだ調子悪い？…ちよつとごめんね」

そんな私の様子に苦笑しながら、頼人さんは私のおでこに手を当ててきた。

「…え…っ？」

「熱はないね」

「あ…ない、と思います」

突然おでこに手を当てられて驚いた私に、頼人さんは苦笑しながら安心したように頷いた。

その時、頼人さんの服からふわっと漂った香りに
グラウンドで意識を手放す前の事が蘇って来た。

…あの時——遠退いて行く意識の中で、体が宙に浮く様な感覚の
後、

感じた、あの香りと力強い腕。

あれは、頼人さんだったんだ…。

そういえば先生と頼人さんは同じタバコなんだって芙美が言っ
たわけ。

あの時、これは夢だと思いながら、どこかで先生であって欲しいな
んて

そんな期待をしてしまっていた自分が恥ずかしい。

そんな訳ないのに…。

「——結夢ちゃん？」

「…えっ！？あ、はい」

また一人で考え込んでしまった私に、頼人さんは苦笑している。

うー、恥ずかしい…。

「もうすぐSHRだから様子見に来たんだけど…どうする？戻れそ
う？」

無理そうなら、芙美に言っ
て荷物持っ
てこさせるけど」

「あ、大丈夫です。戻れます」

「そ？じゃあ、芙美が心配してたから、顔見せて安心させてやって
？」

「はい。あ、頼人さん」

「ん？」

「あの…さっきは、ありがとうございました」

「さっき？」

「頼人さんがここまで運んでくださったんですよ？」

「…ああ、その事か。いいんだよ、教師として当然の事をしただけ
だから。」

……まあ、それだけじゃないかもしれないけど？」

「…え？」

「何でもないよ。こつちの話」

につこりと笑った頼人さんに、なんとなくそれ以上は聞けなかった。

「とにかく。もうこんな倒れるまで無理しちゃだめだよ？」

ちゃんと食べてちゃんと寝る事！わかった？」

多分きつと頼人さんは、私の寝不足や食欲のない理由がわかってい
ると思う。

でもそれに触れないでいてくれる頼人さんの優しさが嬉しかった。

「…はい。以後、気を付けます」

私の返事に微笑むと、頼人さんは立ち上がってカーテンに手をかけ
た。

そして、そのままの格好で少しの間、何かを考えていたと思ったら
微笑を浮かべた顔だけこちらへ向けた。

「…頼人さん？」

「——タッチの差、だつたんだよね」

それだけ言うと、カーテンを開けて出て行ってしまった。

その後にドアの音が聞こえたから、多分もう保健室からも出て行っ
たんだろう。

頼人さんが最後に残した言葉の意味がわからなくて、1人考え込み
そうになったところで

壁に掛けてある時計を見て、慌てて我に返った。

今日は、体育祭の前日と言う事で、午前中4時間のみの短縮授業。

私が倒れたのは2時間目で…今はもう12時半を回ったところだから
2時間近くも寝ていたんだ。

SHRまであと10分しかない。

もうきつとクラスのみんなも教室に戻ってきているだろう。

ベッドから降りる時また眩暈に襲われたらどうしようかと思ったけど

それは杞憂に終わった。

吐き気も治まっていたし、体の重みもなくなっている。

自分が寝ていたベッドを直して、カーテンを開けたところで木下先生が戻って来た。

「あら、もう大丈夫なの？」

「あ、はい。お世話になりました」

「本当よ、もう。いい？ちゃんと食べなきゃ駄目よ？ダイエットなんて必要ないんだから。」

それから、若いからって寝なくても大丈夫！なんて思っちゃ駄目。食べる事と眠る事、これは基本よ。……何があつたとしても、ね」

「……はい。すみませんでした」

「そんな顔で戻ったら、余計にみんなを心配させるわよ？」
木下先生には全部お見通しなのかもしれない。

情けない顔で頭を下げた私に、木下先生は小さく苦笑した。

「笑って？笑顔よ、いい？」

そう言つてわざとらしい程の笑顔を作つた木下先生に、思わず吹き出してしまった。

「うん、もう大丈夫ね。ほら、今ならSHR間に合うんじゃない？」

「あ、そうでした。……先生、ありがとうございます」

『どういたしまして』と微笑む先生にもう1度頭を下げてから、ドアに手を掛けた時

ドアの横にあつた、鏡が目に入った。

その鏡に映る自分に向かつて、もう1度笑つてから保健室を後にした。

ココロノユクエ5

教室に入ると、やはりクラスメイトはみんな、戻ってきていた。

すでに制服に着替えたクラスメイトの中に1人体操着姿というのが少し恥ずかしい。

それでもあんな場所で倒れてしまって、注目を浴びたわけだし…。

目立たないように、さりげなく、自然に…

——…だけど、その目論見はあっけなく失敗に終わった。

「あ！結夢ー！もう平気なの？」

ガヤガヤと騒がしい教室の中でも掻き消されない、その大きな声にクラスのみんなの視線が集まる。

そしてすぐにその視線達は、大声の持ち主の奈津子から私に移動した。

うー…奈津子お…。

仕方なく、その輪に進む。

奈津子の他に、ミドリと芙美がいる。

私が近付くと、奈津子とミドリが捲し立てた。

「ビックリしたよー、もう！いきなり結夢、倒れるんだもん」

「ホントだよー！もう大丈夫なの？」

「あー…、うん。もう平気。…ごめんね」

最後の“ごめんね”は芙美に向けて。

何も言わずに眉根を寄せている芙美が目に入ったから。

「…もう大丈夫なの？」

眉根を寄せたまま言う芙美に微笑んで見せる。

「…うん、ごめんね。心配かけて…」

「もう！結夢のバカ！いきなり倒れて…ビックリしたんだからね！？」

「ごめん…私もビックリした」

「何、他人事みたいに言ってるのよ、結夢」

ホッとしたのか、いつもの調子を取り戻した芙美に、素直に答えたらすかさず奈津子に突っ込まれた。

…だって、倒れるなんて初めてだったんだもん。

「で？どうして倒れたのよ？」

「んー…最近、寝付きが悪くて…寝不足だったみたい。でも保健室でいっぱい寝たから、もう大丈夫」

「まったく…結夢らしいってどうか何ていうか」

意識して明るく答えると、奈津子達は呆れたように苦笑していたけれど

芙美だけは訝るように眉を寄せていた。

そんな芙美に小さく笑って。

「でもさでもさ！かつこよかったよねー！」

「うんうん！かつこよかったわー！あれはまた株が上がったよね」

奈津子達はそんな私達に気付かず、また話し始めた。

興奮したようなミドリの声に奈津子も続く。

「私、お姫様抱っこなんて、生で見たの初めてだよー！」

…お姫様抱っこ？

まだ興奮冷めやらない、と言った感じのミドリの言葉に無意識に聞き返してしまった。

「…何の話？」

「あー、そっか。結夢は意識飛んじやってたからね。知らないよね」
うんうんと1人納得したように頷く奈津子の後を、相変わらず興奮状態のミドリが続ける。

「だから！お姫様抱っこしたのよ！結夢を！」

………
え………！？私………！？

一呼吸置いて、頭がその事実をようやく理解する。

…あんな所で倒れてしまつて注目を浴びたろうなあとは覺悟して
いたけど

まさかそんな注目の浴び方をしていたとは…。

「…うわ…：峰岸先生、重かっただろうな…。さっきお礼は言つた
けど、後で謝つとかなきゃ…」

なんだか妙に気恥ずかしくなつて、誰に言うでもなく1人呟く。

「——何言つてんの？結夢。峰岸先生じゃなくて、檜橋先生でしょ」
「…………え？」

「もうねーすつごくかつこよかつたんだから！倒れた結夢をサツと
抱き上げて！」

「周りにいた女子がそりやもう凄かつたのよ。大騒ぎで」

「当たり前だよー！あの檜橋先生だよ？羨まし過ぎー！」

奈津子とミドリの話は確かに耳に届いているんだけど、頭が追い付
かない。

…だつて、あれは頼人さんじゃないの？

確かに先生だったらいいなとは思つたけど、でも…。

2人の言っている事が信じられなくて、縋るように芙美に視線を向
けると

芙美は一瞬何かを考えるような素振りを見せた後、小さく嘆息しな
がら頷いた。

「…え、だつて…：あれは、頼…：峰岸先生じゃ…」

「檜橋先生の方が、ね。一步早かつたかな」

私の言葉に被せるように言つと、芙美は眉を寄せて苦笑した。

え…じゃあ本当に…？

本当にあれは…あの時の腕と香りは先生だった？

頭の中がパニックに陥りそうになった時、教室のドアが開く音がし
た。

「はい、席着いて。SHR始めるわよ」
入つて来たのは担任の大友先生。

クラス中が未だざわざわとしながらも、各々の席に戻って行くのに倣い、私達も慌てて自分の席に戻る。

「藍澤さん、もう大丈夫なの？」

大友先生は私に視線を向けると、心配そうに声を掛けてきた。

「あ、はい。もう大丈夫です。ご迷惑をお掛けしました」

ペコッと小さく頭を下げながら答えると、大友先生の表情がふつと和らいだ。

「良かった。もうあまり無理しないのよ？体調が悪かったら休みなさい。…教師の私が欠席を薦めるのも変な話だけど」

そんな大友先生の言葉に小さく笑ったけど、頭の中はさっきの奈津子達の話でいっぱいだった。

私からみんなの方へと視線を戻した大友先生が、明日の話をしていただけ

私の耳は、それを音として受け止めているだけで、まったく頭に入って来なかった。

相変わらず頭の中は、奈津子達の話が支配してて。

「いい？それじゃ、明日はいつもより30分早いから。遅刻しないように。それじゃ、おしまい」

週番の号令の声に、慌てて意識を戻して立ち上がる。

大友先生が出て行くと、教室はまた喧騒に包まれた。

今日は体育祭前日で部活動は原則禁止なので、ほとんどの生徒が帰り支度をしている。

そんな中、私はボーッと立ち尽くしたまま、頭の中ではさっきの会話がグルグルと回っていた。

不意にポンと肩を叩かれる。

弾かれた様に振り向くと、心配そうな表情の芙美がいた。

「結夢？大丈夫？」

「…あ、うん。……ごめん、ちょっと混乱してて…」

「……あの時、結夢が倒れた時ね」

芙美は小さく嘆息すると、『もう、仕方ないんだから』とでも言い

たげな表情で話し出した。

「燈吾先生、周りで騒いでる子達の事なんてまるで目にも入ってないって感じで」

躊躇いなく結夢を抱き上げてさ。もう私も頼くんもビックリ……って違うな、頼くんは笑ってたわ」

芙美が何を言いたいのかわくわからなくて、私は言葉が出てこない。「……頼くんが1番近くにいたんだよね、私達の。だけど1番最初に気付いたのは、燈吾先生。」

——どうしてだろうね？」

「……どうして、って……」

意味あり気な芙美の言葉に、どうしたって都合良く考えてしまいそうになる。

だけど、そんな事ある訳ない、ともう1人の私が言う。

だって私は2回も先生に拒絶されているのだから。

……でも。だったらどうしてあの時抱き締めたの？

どうして今日、皆の前で私を抱き上げてくれたの？

どうして優しくするの？——どうして突き放してくれないの——

……？

「……結夢はさ、色々我慢し過ぎ。1人で溜め込み過ぎ。……それから遠慮し過ぎ。」

『聞かなかった事にさせてくれ』？ほんととズルイよね。それって、燈吾先生の勝手な言い分でしょ。

じゃあ結夢の気持ちはどうなるの？このまま、前に進めないままでもいいの？」

芙美の言葉にズキン、と胸が痛む。

進めるのなら前に進みたい。受け入れて貰えないなら、それでもいい。

辛いけど悲しいけど……はつきりと『受け入れられない』と言われたらすぐには無理でも、きつと少しずつ前に進めると思う。

例え先生を好きな気持ちが消えなかったとしても…それでもきつと前に進めると思う。

——本当は気持ちを伝えるつもりなんて全然なかった。というより、きつと伝えられなかった。

だけど。あの時、醜い嫉妬心が顔を出して、気が付いたら感情的に気持ちをぶつけてしまった。

それに、2回も先生の前から逃げ出して…。

…本当にこのままでいいの？

こんな中途半端なままじゃ、いつまで経ってもきつと前になんて進めない。

受け入れて貰えなくてもいい。だけど、前に進みたい。

うん、やっぱりこのままじゃ嫌だ。——逃げてばかりじゃダメなんだ。

ココロノユクエ6

いつの間にこんなに先生の事が好きになったんだろう。

今まで好きになった人は…と言ってもそんなにいないけど、みんな同年代の人だった。

それでも報われなかったのに、それが“先生”じゃ、きっと尚更報われない。

——だけど、やっぱり先生が好きで。

2度も拒絶されたけど、それでも先生を好きな気持ちは変わらない。みつともなく嫉妬して自分の気持ちを感情のままにぶつけて拒絶されて……。

痛くて苦しくて切なくて。

食欲もなくなつて眠る事さえできなくなつて…それでも先生が好きで堪らない。

迷惑をかけたい訳じゃない。

本当は怖くて堪らない。

胃の辺りが苦しくて、心臓もドキドキしてる。

また拒絶されるんじゃないかって。

だけど、やっぱりこのままじゃ嫌だと思う自分がいる。

あんな伝え方じゃなくて、もっとちゃんと伝えたい。

受け入れられない事はわかってる。

『聞かなかった事にさせてくれ』と言った先生に、もう1度気持ちを伝えたところで

迷惑をかけてしまうだけだったのは、ちゃんとわかってる。

だけど。自分勝手かもしれないけど、あんな感情に任せて気持ちをぶつけるような伝え方じゃなくて

もっとちゃんと伝えて、それで自分の気持ちに踏ん切りをつけたい。前に進みたい。

——だから先生、ごめんなさい。もう1度だけ——。

「あ、頼くんからメールだ。…『燈吾は教官へ室やにいるよ』だった。…まったく。お節介なんだから、頼くんは。

っていうか、タイミング良過ぎ。どこかで聞いてるとか？」

悪戯っぽく笑っていたかと思ったら、訝しげに眉を寄せた芙美がキョロキョロと辺りを見回す。

似た者同士の2人に何だか笑ってしまった。

そうしたら少し、胃の辺りの苦しさで心臓のドキドキが収まった気がした。

“教官室”という言葉に、足が竦まなかったと言つと嘘になるけど…でも大丈夫。

逃げないって決めたから。

「ありがとう、芙美。それから頼人さんも。…私、檜橋先生に“お礼”…言ってくる！」

迷いが出てしまわないように、怖くて逃げ出してしまわないように、先生の教官へ室やまで、脇目も振らず走つて来た。

ドアの前に立ち、乱れた呼吸とうるさい位に騒いでる鼓動を整える為に、何度か大きく深呼吸をする。

体の震えが止まらないのは、走つて来たからか…それとも緊張と怖さからか。

もう1度ひとつ大きく深呼吸した後、震える右手を左手でギュツと押さえて、ドアをノックした。

「——はい」

中から聞こえた先生の声に、心臓が跳ねる。

頼人さんに教官ご室にしていると教えて貰つて来たのだから、先生がいる事はわかっていたけど…もう逃げられない。

逃げないって決めたのに、怖くて逃げたくて、そんな矛盾した事を考えてしまう。

ノックをしてからドアが開くまで、一瞬のようにも永遠のようにも感じた。

「――藍澤？」

訪問者が私だとは思わなかったんだろう、ドアを開けた先生は驚いた表情で私を見下ろしていた。

心臓がより一層バクバクと高鳴りだし、体の震えも依然止まらない。だけど、体の横に下ろした両手をグツと握り締めて、なんとか声を絞り出した。

「あ、あの……！突然すみません！今少し……いいですか？」

声が少し裏返ってしまったけど、なんとか言えた。

「あの……ダメ、ですか……？」

でも……先生からは何の返答もなく、知らず俯いてしまう。長く思えた沈黙の後、ようやく先生の声が聞こえた。

「……あ、ああ、いいよ。――どうぞ」

先生が私を迎え入れるようにドアを大きく開くと、今まで先生の体で見えなかった教官へ室やの中が見えて

一瞬、足が竦んだ。

「……ありがとうございます。失礼します」

恐る恐る、あの消し去りたい記憶の残るそ・こ・に一歩足を踏み出す。

先生の教官へ室やはあの日と変わらない。

部屋の奥の窓を背にしたデスクも、テーブルと小さなソファの簡易な応接セットも、右側の壁を覆ってる本棚も。

あの日と違うのは、あの甘い香水の香りがしない事だけ。

その事に少しホツとする。

2歩3歩と中に進むと、後ろでドアの閉まる音がして、反射的に肩がビクツと上がる。

足が止まってしまった私の横を通り抜けて、向かい合うように先生が振り返った。

「――それで……どうした？」

バクバクとうるさい心臓を宥めるようにひとつ小さく息を吐くと、顔を上げて先生と視線を合わせた。

「あ、あの！さっきは…ありがとうございます。その…先生が、保健室に連れて行って下さったって…」

「——ああ、その事が…。教師として当然の事をしただけだよ。…もう大丈夫か？」

「あ、はい。もう大丈夫、です」

「そうか…無理はするなよ」

「はい。ご迷惑をお掛けしてすみませんでした。ありがとうございます」

もう一度頭を下げて…そこで会話がなくなり、沈黙が漂う。

——怖い。沈黙があ・の・日・を嫌でも思い出させる。

この場所、この沈黙——。

すべてがあの日とシンクロするようで、心臓がうるさく鼓動し、背中に冷たい汗が流れる。

だけど。言わなくちゃ。その為に今、私はここにいるのだから。

前に進むと決めた。先生の返こた事えが、どんな返こた事えでも覚悟はできてる。

自分の気持ちに決着をつける。

今度こそはつきりと『受け入れられない』と言われても構わない。むしろ、そうはつきり言われた方が、私の心おもいは行き先を見つけられる。

どんな結果であれ、もう一度きちんと気持ちを伝えて前に進むと決めたんだ。

「——先生」

ひとつ大きく深呼吸して、それでも治まらない鼓動を押さえ付けるように声を出すと、先生と視線を合わせた。

「どうした？」

先生の瞳に私が映っている。それだけで泣きなくなる。

もう2度と、先生の瞳に映る事はないかもしれないから。

だけど。意を決して言葉を紡いだ。

「…ご迷惑なのはわかってます。…困らせてしまっただけだって。だけど、もう一度だけ言わせてください。」

ちゃんと…諦めます。ちゃんと“生徒”でいます。だからもう一度だけ…」

「藍澤！？ちよつと待…っ」

「先生が好きです」

私の告白を止めようとする先生の言葉を遮って、言葉を―想いを―吐き出した。

視線は逸らさない。逸らしたくない。

生コド徒モの想いだと思われぬように。ちゃんと伝わるように―。

怖くて怖くて堪らない。体の震えもさつきから一向に治まらない。

本当は今すぐにでも逃げ出したいくて堪らない。

だけど、そんな自分の心に負けないように先生を見つめ続けた。

いつもの、先生の鋭い、だけど優しい瞳が困惑の色に変わり、視線を逸らされる。

やっぱり先生を困らせたただけだった、と胸が痛くなる。

でも。後悔はしてない。ちゃんと自分の気持ちを伝えられた。今の私にはそれだけで充分。

これできつと前に進めるから。

あとは先生の返こた事を待つだけ――…。

「――ごめん」

絞り出したような、先生の返こた事え。

わかっていた事だけど、心がズキンと音を立てた。

だけど、心はどこかすつきりしていた。

同じ人に2回も振られてしまったけど、でもこれでやっと前に進む事ができる。

嫉妬から晒してしまった醜態、気持ちを伝えて拒絶されて、寝る事

も食べる事もできなくなつて…

それでも好きで好きで仕方なかった、痛くて辛くて苦しい恋。全部、初めて知った恋。先生を好きになって知った気持ち。

いつか先生じゃない誰かを好きになったとしても、きっとこの恋は忘れないと思う。

先生をこれ以上困らせないように、自分の気持ちに決着をつけるように、精一杯笑顔を作った。

「…わかりました。ありがとうございます。約束通り、ちゃんと“生徒”でいます。

お時間取らせてすみませんでした。…でも伝えられて良かったです」

大丈夫。私、ちゃんと笑えてる。

——大丈夫。ちゃんと前に進める。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6969v/>

Acacia

2011年11月15日09時00分発行